
村役人と小歩き

西崎皓之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

村役人と小歩き

【Nコード】

N3346J

【作者名】

西崎皓之

【あらすじ】

江戸時代を背景に兵助と熊蔵を主人公にした物語です。
相模・深見村の事情や事件、
兵助の苦悩、家族との生活、
それに村の風物、はたまた熊蔵の恋をお楽しみに！

訴状

—

三日後大雨が降った。

二昼夜降り続き暑さを持つていった。

その後四、五日、日が差さず冷たい風が吹いた。それから晴れた日は乾き、曇りの日は湿った。雨が降って蝉の代わりに虫が鳴き、寝苦しい夜が去った。

沈んでいた心は澄んできたが、底に不安が潜んでいた。兵助は等身の自分を見ているはずだし、そこから世の中を見ているはずだった。それなのに徒労感のようなものに襲われるのはなぜなのだろう。自分が無力に感じるのはなぜだろう。何を望んでいるかさえ分からなくなってくる。

世の中になにもないことはないのだから何も見ていないのだ。自分を止まった者とししか見なさないからだ。日々動き刻々変わっているのにそれに気付いていないからだ。

——耳を澄まさなくてはならない。

子が七人いるのは村でも少ない。経済的理由によることが多いが乳児に死ぬ率も高い。だから三歳までは員数に入れない。あつけない子は死んでしまう。団治が生きているは幸運だった。その子の生は天命だ。親は嘆くが重くは受け止められない。間引かれる子も後を絶たない。六歳まで子は人の世に属してはいない。疫病の怖さは分かっている。といって次々と死んでいく子を見ても打つ手はない理由も思いつかず慄くだけだ。せいぜい魔よけや祈祷をするにすぎ

ない。弱ければ大人も倒れる。天変地異や疾病に対抗する術はない。黙って頭上を過ぎるのを待つしかない。

といって生の儚さに不安を感じているわけではない。死の予感に怯えているでもない。すべてが終わってしまったわけではない。ここから始まるものもある。若い連中はここから生きていかなくてはならない。辛いかもしれないがその中で楽しみを見つけていくのだろう。人の暮らし方そのものが変わるわけではない。社会が変わっていくだけだ。よりよい社会と願うだけだ。

ただそのことについても見通しは暗い。生産の拡大が地平を切り開くだろうが、制度が追いつかず器が一杯になる。どこまで言っても繰り返しが経験をいかすこともできるはずだと思わなくてはならない。たぶん同じ失敗はしないはずだ、と思いたい。そのためにもしつかり生きていかなくてならない。妥協しては先には進めない。

「どうかしましたか」

るいが言う。呆けた顔をして外を眺めていたのだろう。今日は昼から年貢勘定目録に載せる経費を調べていた。村が上納した年貢の明細と実際の納入金額、日付の内訳だ。精算して江戸に届けねばならない。

大雨で村の北側の原で被害が出た。そこは先が堀と呼ばれる窪地になっている。小作地の多い所だがひどいという。収穫間近の作物がやられたらしい。そのわりには田かたの方は無事だった。全体とすれば減免の基準にいたらないだろう、というのが多数の判断だった。村としては何もできない、と兵助も思った。

名請けであればまず五人組が連帯で租税の負担をすることになる。地類なりで村人の誰かが助けることになる。建前としては税を払わなければ懲罰になるが、実際にはそんなことはない。最悪、走りといって村から逃げ出す、それも他村の親戚の所に行くということだ。身請けがあればそこで人別帳に載ることになるから無宿人にもなら

ない。違法ではあるが妻子を残した場合、ほとぼりが冷めて戻ってくることもある。無高の場合そもそも税がかからない。問題は食えるか食えないかだ。最良の解決法は小作料をまけてもらうことだが、それは当事者の交渉だから村から何かいう筋合いではない。

そもそも年貢の徴収は十月に地頭から年貢割付状が送られてくることに始まる。

もう何十年も同じ文面であるし、村人も自分がいくら払うものかは承知している。だから村役は各々の年貢高を確認し通知するだけだ。そして五人組なりで割当てを金納すれば済むことになる。

だから、収穫の終わったところ訴状が投げ込まれた時は驚いた。内容もそうだが、まず兵助のところに置かれたことが不思議だった。訴の宛名は坂本氏であるが兵助の領主とは違う。吉兵衛ならまだ分かるといった具合だ。間違えとも思っただけでみると余計わからなくなつた。真意が見えてこない。小作の半減引き方を望んでいる。番町屋敷に出向いたが受け取ってもらえず兵助の所に置いていったらしい。助けを求めているのだろう。ただやり方がでたらめだった。騒ぎを起こせばどうにかなると考えたのだろうか。

百姓一揆の噂は聞えてくる。切羽詰つたのだろうし、失うものもなかったのだろう。首謀者が処分され少し改善されれば上出来なのだろう。そういう状況とは違うような気はするが、捨ててはおけなかった。なぜ兵助のところにかが問題だった。地頭屋敷で受け取っていたら大変なことになった。処分は免れないし村役にも責が回ってくる。吉兵衛は何も知らないだろう。知つたらどうするのだろうか。皆で集まって善後策を講じなければならない。村の中で押さえつけて解決しなくてはいけない。処分者を出すことは無意味なことだ。訴えを出すことが愚かで得にならないことを納得させねばならない。そのために最初に何をするべきなのだろうか。まずこの書を置いていった人物に会わなくてはならない。

熊蔵を呼んで事情を調べてもらった。その間に吉兵衛に会いに行

った。

訴状を見せると俯いて考え込んでいるようだった。最後に手を広げて顔を上げた。苦笑いのように見えた。兵助は訴状を受け取った。「困りましたな」

吉兵衛は決して質問しないし、自分から動かない。だからいつも違和感を覚える。兵助が何か言うのを待っているのかもしれない。あるいはこのまま帰っても気にしないのかもしれない。そう考えると兵助のほう及早急なのだろう。放っておけばそのまま収まるのだろうか。直接兵助に関係あることではないし、間違えて置かれていたと告げればいいことかもしれない。吉兵衛は考え続けているのだろうか。

「とりあえず私の方の事なので任してください。追って伝えますので、今日は有難うございました」

やっとそう言うのと立ち上がった。会見は終りということだ。この後村役を召集するのだろうか。

これで良かったのだろうか。吉兵衛に知らせないわけには行かないのだからこれしか道はない、と納得するしかない。言いたい事もあったがそのまま帰ってきた。

村が騒然としていることはないが、重くのしかかる雲のように覆ってくる不穏な空気があった。多くの百姓が貧窮し富が偏り始めている。健全な小農民が成り立たなくなつて、隷属するようになっていくのだ。結果的に領主への負担が大きいのだろうし、商品という町からの影響があるのだろう。ぎりぎりのところで生かしておくべき農民が崖を落ちかけてしまっている。これは失政なのではないだろうか。旗本の統治に期待すべきものがなくなっている。領主自体が火の車なのだ。それは幕府についてもいえるのだろう。

一面、村の発展が頭打ちになつていくことをも意味する。開発は進んでしまい生産の量がもう上がらなくなり、村として成熟してし

まった。もつと言えは社会全体が行き止まってしまった。器が限られれば弱い者が沈んでいくことになる。多くの者の生存が一部の勝者に握られることになる。

熊蔵が若者を連れてきた。勘助と同年代なのだろうか、気の強そうな顔をしていた。緊張している。熊蔵とどんなやり取りがあったのだろうか。調べるとはいつたが連れて来いと言わなかった。

「奎左衛門です。話がしたいというので連れてきました」と熊蔵は言う。

「聞こうか」と言つて框に兵助は座つた。二人は立っている。奎左衛門は話し出さない。

「それではこちらから訊こうか。悪いようにはしないから正直に答えるんだ。まずあの訴状は誰が書いた」

「おれだ」悪びれた様子はない。

「地頭屋敷にはいつ誰と行った」

「おととい夜に勝右衛門さんと源左衛門さんとで出かけた。朝着いて屋敷を探したけれどはつきり分からなくて、門も閉まっていたのでそのまま帰ってきた。それでは仕方ないので村役さんの所へ投げ込んだ」

「どうして吉兵衛さんのところにしなかったのだ」

「そのまま捨てられそうな気がした」

確かに兵助ならおせっかいを焼くと思つたのだろう。

「熊蔵さんに相談しようと思つたけどできなかった。本当に親子三人食つていけないんだ」

「あつしからもお願いします」

と熊蔵が口を挟んだ。

「こいつは早く親父を亡くしてお袋と妹の面倒を見てきたんです。

悪い奴じゃないんですよ」

「訴は内容の是非に拘らずご法度なんだ。そこを分かっていなくちゃならない。いいな、訴状は俺が預かつておく。考え足らずという

ことで大目に見よう。地持ちには吉兵衛さんの方で掛け合ってくれるだろうから、おとなしく待っているんだな。後の二人にもこちらへ来るように伝えておいてくれ」

礼を言つて空左衛門が帰って行ったあと、

「どうなんだ」と熊蔵に尋ねた。

「へい、今の話に違いはないんですが、三人だけで仕組んだとは思えないんですよ。三人とも関の連中ですが部落ではほとんど皆この事を知っているんですよ」

「どういう事だ」

「江戸に行くことは知っていたということです。誰か焚き付けた奴がいるんじゃないかと思えるんです」

「腑に落ちないな。そんなことをして誰が得をするんだ」

「脚を引つ張りたいと考える輩もいるんじゃないでしょうか」

——そういう問題なのだろうか。そうだとすれば馬鹿げたことだ。

「あいつらは利用されただけです」

であれば何が目的なのだろう。

「組頭が絡んでいると」

「そこまではどうですかね」

「地持ちは誰だ」

「徳兵衛と八右衛門です」

徳兵衛は島津の本家領、八右衛門は久保の分家領。二人とも質屋をしている。

「するとおれの役は何になる」

「こう言つと言葉は悪いですが、立会人ですかね」

三文芝居の観客だった。

しばらくして二人がやってきた。三十歳過ぎのが勝右衛門で、源左衛門の方が少し若かった。兵助は説明して質問した。年上の方が答えた。字がうまく書けないので空左衛門に頼んだこと。地持ちに話したが聞き入れられないので、訴のことは自分が持ち出した。相

談する相手は他にいなかったこと。名請けはしているが大半の田畑は先代のころから質地になっていること。家族のこと、食えないこと。

「ところで部落の者が皆知っていたのはどういうわけかな」

「知らせるつもりはなかったんだが、夜出かけるときに人に会ってつい江戸へ行くことを喋っちまったんだ」

「その人は何て言った」

「最初は止めたけどあとでは気をつけろよと送ってくれた」

「その人は誰だ」

「名前は言えない」

「その人が皆に話したのなら訊けばわかるぞ」

「組頭の倅の又蔵さんです」

「それでは訴については誰から聞いた」

「江戸に奉公に出たとき聞いたことがあった」

「もういい。家でおとなしくして待っているんだ」と言っで、二人を帰らせた。

二

「先の連中に十人ぐらい加わって諏訪社に集まっています」

熊蔵が知らせにきたのは日暮れ前だった。

「様子はどうだ」

「今の所は騒ぎ立ててはいないですが」

——まずい展開だな。

あれから五、六日経って片がついたのかと思っていたが、そうは行かなかったようだ。

「寺へ行つて住職に頼んで話を聞いてもらってくれ」

兵助が駆けつければ、公のことになる。もう少し様子を見ていないではならない。気はもめるが風呂に入って飯を食った。

「酒が一樽入って飲み始めました」

熊蔵が戻ってきたのは、ちょうど食事が終わった時だった。

「住職はどうした」

「まだいます。話はしていますが、聞く耳は持たないという感じがすね。ただ追い返すというほどでもない」

「酒は誰が差し入れたんだ」

「それがはつきりしません」

熊蔵は首を回して空を見た。

「どうも徳兵衛さんじゃないかと思うんですが」

——徳兵衛は地持ちで連中が訴えている相手じゃないか。

「よくわからないが、ただ四斗樽を用意できる者は限られているな。それで首謀者はだれかな」

「又蔵はいましたね。住職が話しているのはこの間ここに来た三人ですが、かえって回りの者のほうがうるさそうでした」

「やはり関の者か」

「それに島津の連中ですね。少し人数が増えました」

諏訪社は島津にあるから聞きつけて集まった者もいるし、酒が入れば騒ぎ立てる輩も出るだろう。

——さて、どうするか。騒ぐのが目的だから一騒ぎさせて解散させるのがいいだろう。又蔵がいるのなら余計、親の組頭と島津の組頭に説得させるのが筋だ。それでそのあと連中が納得するかが問題だな。

「とりあえず、関と島津の組頭を呼んでくれ。あとは戻らずにそのまま諏訪社に張り付いていてくれ」

常助と平左衛門を呼んで一緒に行かせた。

「すぐ戻るから誰か来たら待ってもらってくれ」

るいに告げて外に出た。吉兵衛に話を聞いてこなくてはならない。

吉兵衛は家にいた。

「騒ぎになっっているようだ」と言う間にも、落ち着がなく目があちこちに飛んだ。

「地持ちには掛け合ったのですか」

「それが組頭に諮ったら、相対が筋だろうということになって、見送った」

「他の手は打ちましたか」

「組頭から訴えを出した者に話を聞いた」

「結果は」

「小作の引き米が認められなければ集まって地頭に訴え出る、という事だった」

「一揆ですね」

「それは困る、待ってくれということ引き取らしたが、連中は数をたのんで地持ちに押しかけたらしい」

「いつのことです」

「今日、三、四人に分かれて地持ちを訪ねている」

「内容は」

「分からない。ただその後みんなで集まって諏訪社にこもったらしい」

連中を結び付けているのはなんだろう。個々の小作には対抗の術はない。ただ小作人がすべて作業を放棄してしまえば地持ちも困ることにはなる。困った時は助けてくれよ、というのが彼らの言い分だろう。困るのは村役人もそうだ。領主から叱られることになるし、咎も受けるだろう。もちろん首謀者が一番罰を受けることにはなるのだが、嘆願すれば軽くなるはずだ。

吉兵衛のところから戻ってしばらくして、又左衛門と六右衛門が並んで入ってきた。

「ご苦労様。さっそくだが、又左衛門さんの子が諏訪社にいるのは承知だね」

又左衛門はひげの濃い、がっしりとした体格の男だった。兵助と同年代なのだろうか。

「申し訳ありません。目が届きませんで、尻馬に乗って徒党を組んだようです」

「他にも若い衆はいますか」

「五人は確認しています」

「六右衛門さんのところでは何人ぐらい、あそこにいるのかな」

「はっきりいえば、本所様の者はいません。うちの部落のものは四、五人いると思います」

「なるほど。若い衆ですか」

「それが小作でないものもいます」

六右衛門は小柄で、ごま塩頭に手をやっている。

「どういう訳ですかね」

「勢いじゃないですか。元気のいい奴らです」

「たぶん今ごろ酒も回って氣勢を挙げているでしょう。お願いなんです、様子を見て引き上げるよう言ってもらえませんか」

六右衛門はすぐには答えない。確かに簡単に請け負えるものでもないだろう。

「どうですか」

又左衛門の方に声を掛けてみる。

「やってみましょう。家族のものを連れ出して引き取らせましょう」

「六右衛門さんもお願ひします」

「わかりました。番長様の組頭にも話を通して引き上げさせます」

「このあと、どうなりますか？」

又左衛門が訊いた。

「収まらない者がいるとしたら個別に話さなくてはならないでしょう。ただ地持ちに方策をとってもらわなくては、きっかけにならない。今日の掛け合いについて何か知りませんか？」

「すぐ断ったというのではなく、含みを持たせたようですよ」

「どんなことです」

「はつきりはしていないんじゃないですか」

「徳兵衛さんが酒を差し入れたというのは確かなんでしょうか」

「打ち壊しても怖れて地持ちが、つけたということですか」

六右衛門が横から言った。

百姓一揆を幕府は一揆とは言わない。多数による武装蜂起を一揆といつて、島原、天草以来一揆はないとしている。ただ勢いあまつて倉など打ち壊してしまうことはある。

禁令によれば、何事によらず、よろしからざる事に百姓大勢申し合わせるのを徒党と呼ぶ。徒党して願い事を果たそうと強いるのを強訴という。また申し合わせて村方立ち退くのを逃散という。前々からご法度である、としている。

また領主、地頭屋敷の門前へ大勢詰めよつて、強訴したときは、頭取（首謀者）は遠島。門前にいた者は三十日あるいは五十日の手鎖。残つた百姓はきつと叱り、程度により村に科料がかせられる。

連中がするぞ、と脅かしているのはこのことだ。

前の仕置きはもっと厳しかった。頭取は死罪。名主は重追放。組頭は田畑取り上げのうえ所払い。惣百姓村高に応じ過料、というものだった。

もし領主にこの訴えが出されたとしたら、どうするだろう。筋を重んじる殿様だとしたら、小作人に救済米を出すだろう。そしておいて厳罰が下るはずだ。村役人は追放で、地持ちの田畑を取り上げたらみんなが喝采するだろうが、そんなことは起こらない。それをやるのは地持ちの連中だ。小作料の引きが難しいとすれば、救済の食料と種籾を与えることになる。名主の役が欲しければそれを要求するだろう。

——落しどころはその辺りだな。幕引きまでやつてもらえれば助かるのだが、どうなるのか。

二人と入れ替わりに平左衛門が戻つて来た。

「遠巻きの員数は増えましたが、中はそれほど騒がしくはないです。

住職は帰りました」

「番長様の村役は集まっていたかな」

「組頭は見ましたが名主さんは来てませんね」

吉兵衛の対応がとりわけ悪いわけではない。自ら出て行って連中と交渉するのが得策だとは思えない。

「連中が本気で事を起こそうとしているようには見えないのだがどうなんだろう」

「今まであんなふうにな人が集まることはありませんでしたから、本気かは別にして危なくなっているのは確かですね」

「いつでも起こりうる状態ではあるな。少し様子を見てくるからここに残っていてくれ」

外に出る。冬の空気は澄んでいて満天に星がきらめいていた。火照った体に大気の冷たさが快い。騒動が起こっているような気配はなく静かな道が延びている。寺の石段を登った。住職を訪ねる。本堂に案内された。何か勤行をしていたのだろうか、経を唱え終わると対座した。

「先ほどはご足労をお掛けしました。お礼を申しあげます」

「いや、村の大事ですから構いません。諏訪社に集まっていた人々も力づくで何かしでかそうとしているわけではありません。得物を持ち出すこともなく、幟さえありません。悪党やならず者とは違います。だが、ご法度であることは説明しました。家に戻るよう説得しましたが聞き入れられませんでした」

「本当に有難うございました。ご住持様には感謝いたします。ところで、この事件を隠しておくわけにはいかないでしょう」

「そうです。報告しなければ地頭様よりお調べに来られます。だから解決して先にお願ひしなければ罰が重くなります」

「主だったものというとな誰になりますか」

「頭というような者はいませんね。小作人たちに同情して寄って来たという感じで、自分たちが大それたことをしているという気もな

いでしょう」

「騒ぎを煽っていると感じた者はいませんか」

「口が立つのは又蔵ですが、代弁しているといったようで先頭に立っているわけではありません。強硬なのは勝右衛門ですが、当事者の一人であるに過ぎません」

「地持ちの動きはどうですか」

「そこが難しいのです。八右衛門さんの所の者がいましたね。徳兵衛さんが酒や肴を差し入れたそうですし、どうなっているのか。それに後から来た者は単に酒を飲みにきただけです」

「煽っているのではないとしたら、地持ちは不穏な集まりでなくて、何かの寄合にしたいのかもしれないね。それなら話は通る。どうですか」

「それで収まれば可能かもしれませんな」

「何とか収めて、地頭に報告は上げますので住職も協力してください」

「分かりました。様子を見てみましょう」

寺を出て諏訪社に急いだ。山王者の前で熊蔵に会った。

「組頭が来て引き取らせました。いまそれを伝えようと戻ったところですよ」

「すんなり引き上げたのかい」

「親や嫁子供まで来られたら意気地がないですよ。ばつが悪そうので取り合えず解散することになったようです。ちょうど酒もなくなつた。裏がありますね」

「今日、地持ちへ押し込んで、つるんだ奴がいるのだろう。八右衛門のところに行った者は割れているかい」

「掛け合いに行ったのは皆、小前の百姓連なんですが、全員の名までは分かっていません」

「それは後で必要になるな、地持ち別に調べ出しておいてくれ。頭は分かるか」

「角兵衛さんと元右衛門さんは行っていますね」

「元右衛門は少し変だな。宮下の者が出て行くとはな。あと宮下から行った者はいるかい」

「作兵衛さんですかね」

「分かった。ご苦労だったな、休んでくれ」

「旦那は？」

「現場を見てくるよ。そうだ、常助はどうした」

「先に戻りました。お供します」

そんなに時間はかからなかった。火の始末はしていったものと見えて明かりがなかった。慌ただしく出て行ったように雑然と物が転がり、今までいた形跡を残していた。誰が残っているような気がしていたが見事に空だった。

「手際がいいな。小半刻で引き上げた」

「親父が出てきたんで又蔵さんが説得したようです。今日はとりあえず帰ろうということでしょう」

「次があるかな」

「どうするんで」

「まず今日集まった者を定めなくてはな。それから主だった者を呼んで調べる。問題は地持ちの連中だが、呼び出すのは難しいな。そこは吉兵衛さんに任せるしかない」

「本所様の所の者はほとんどいませんからね」

「帰ろう。祭りは終わった」

三

このことは未来への序章なのだろう。これからいつでもどんな理由でも騒ぎが始まる。力で押さえつけることはできない。内部で疲

労し、燃え尽きるまで収まることはないだろう。それがよりよい結果をもたらせばいいのだが。もっと怖いのは村人自身が壊れていつてしまうことだ。自堕落と無法が村に浸透していく。崩壊させてはならない。より大規模な騒動が起きるとするなら、それにははつきりとした未来像と指導者が必要になる。

結果は取った。地持ちが小作料の半減を認めて、種籾を貸し付けることになった。前例にしない、と領主に書き送らなければならぬ。

吉兵衛がひよこつと現れた。

名主は辞めると言う。

なんとも言えなかった。詰め腹を切らされたのだろう。残念そうではなかった。春になったら店先で酒を飲ませる居酒屋を始めると言う。兵助にはよくわからなかった。

「あとは名主は誰が継ぐのですか」

「質屋だ」

と吉兵衛は空を見て言った。

結局、後始末は兵助がすることになった。事件は強訴にも及ばず、徒党を組んだことにもならなかった。連判状は作られていない。訴状はあったが兵助が処分した。といって寄合いでした、というわけにはいかないだろう。徒党と見られるようなことがあったので、空右衛門ほか二名を組預けにしましたのでお赦ください、と口上を住職に頼み両地頭の所にいつてもらう。後日、当人と組頭の詫び状を連判の上、名主より差し上げます、と付け加えてもらった。

念のために空右衛門を呼んだ。作兵衛は尻馬に乗っただけだろう。空右衛門はしっかりした男だった。少しくつ過ぎるかもしれないが、押す人がいれば村役をするだろう。まだ三十の半ばだった。

「お手柄だったようだな。話をつけたのはお前さんだね」

元右衛門は頭を下げたのか、上目遣いで兵助を見た。何か探っているようだつた。

「とんでもない」笑いながら頭をさわつた。

座敷に上げていた。調べではなくて話をしている格好だつた。

「隠すことはないだろう。どんなことなのか教えてくれないか」

名請けの百姓は地持ちに押しかけたが、多くは諏訪社に行っていない。そこで話はついたと考えるしかない。熊蔵が裏があるというのはそういうことだろう。元右衛門は黙っている。

「では、違う風に訊こうか。なぜ八右衛門の所に行った」

「村役の設定が筋違いということ、地持ちとは掛け合えないと聞いて、それではいけないと思いました。何もしないのは騒ぎを大きくするだけです」

「八右衛門はどう答えた」

「なぜ村役は相談に来ないのかと訊きましたので、相對のものだから差し控えたのだろうと答えました。ただ、こういう風な騒ぎになったら、お願いしなければいけないと思ったので私どもが参つたと言いました」

兵助は頷いて先を促した。

「もちろんご法度に触れるかもしれませんが、村役にはできなくて私どもには許されることがあります。すると八右衛門さんは、騒ぎが広がるのは本意だから、地持ちで相談して何とかしてみよう、と言ってくれました。それで私どもは引き上げました。あつたことはそれだけです」

「小作の者には伝えたのだね」

「もちろんです。今回はあの者たちの問題ですが、いつか自分たちにも係わってくることです。だから出向いたのですが、氣勢を挙げようとは考えていませんでした」

「誰が集まりを呼びかけたのだろう」

「呼びかけというか、事情は聞いていましたから、要は前に話があつて当日行つてくれと言われたのです」

「なるほど。ところで、吉兵衛が辞めるのは知っているのかい」

「決まったのですか」

「本人が言っていた」

「今度のことで名主さんは全然腰を上げようとしませんでしたので、不満に思っている人はいました」

「わかった。暇を取らしたな」

話の筋は通っている。こんなふうに物事は流れていくのだな、と兵助は感じた。

更に徳兵衛のところへ行つた者の話が聞きたくて熊蔵に訊いた。

「調べておきました。徳兵衛さんには又蔵と関の者が行つてます」

——又蔵か。

又蔵なら駆け引きはできそうにないな。

「又蔵のほかは誰だ」

「松之介と伊三郎でまだ若い者ですね」

それでは軽くあしらわれてしまうな。甘く見たもので酒をつけたというわけかな。

「八右衛門の所の者が諏訪社にいたと聞いたが、どんな奴だ」

「何と云うのですか、番頭のようなことをしている利左衛門というものです。奉公人ですが質屋を手伝っているのか、何をしているのか田畑には出てきません」

「吉兵衛さんが辞めるというが何か噛んでいるのかな」

「やはり、睨んだ通りですよ。誰か筋を書いたものがあるはずですよ。どうも端からおかしいと思いましたよ」

「利左衛門の話聞いてみるか」

「わかりました。呼んできます」

利左衛門は三十四、五歳。どうも一筋縄では行かない感じだ。袷の着流しで細身だが機敏そうだった。頭を低くしていた。

「今日は咎めるつもりで呼んだわけではない」

兵助は上り框に腰掛けていた。利左衛門と少し離れて熊蔵が立つ

ている。

「申し訳ありません」

利左衛門は殊勝にうな垂れた。

「話が聞きたいんだ。いいかな」

「なんなりとおっしゃってください」

「なぜ諏訪社へ行つたんだい」

「主人に様子を見てくるように言われました。ただ外から窺うつもりでしたが、見つかりまして中に引きずり込まれた次第です」

「なるほど。なぜ逃げ出さなかった」

「今更逃げても仕方なく思いましたし、どんな経過を辿るか見てやろうと考えました。だから解散のときは早く帰るよう説得しました」

「それは主人に言われていたのかい」

「そうではなくて自分の判断です」

「それでは連中の様子はどうか。あるいは主人にどう報告した」
「思ったより静かで、興奮して騒ぎたてるといふほどでもなかったです。ただ酒が入って声や動作が大きくなりましたが、物を壊したりはしていません。人が増えて口論のようなことはありません」

「結局どんな話だったのかな」

「どうしても小作の引き米をしてもらうのだ、ということです。それができないならお屋敷に押しかけるといふことです」

「口論という」

「酒の勢いかもしれませんが、これからまた地持ちの所へ押しかけようとか、反対にお屋敷にいくのはまずいのではないかと、いろいろです」

「あの中でお前さんの知り合いというのだれになるのかな」

「家の小作の者は皆知つてはいますが、これといって付き合いがあるわけはありません」

「勝右衛門はどうかな」

「年のころも同じなので口は利きますが特にということもありません」

「そうは聞かなかったな」

利左衛門は少し考えた。兵助は鎌を掛けた。

「勝右衛門から相談を受けただろう」

「……」

「どうなんだ」

強く言ったので利左衛門は観念したようだった。

「確かに引き米のことで話は聞きました。それは私の仕事のようなものです、主人に伝えるとは言いました」

「それだけではないだろう」

「いろいろ脅かすようなことも言いましたが、取り合いませんでした」

「なぜ脅かすんだ、頼みに来たのではないのか」

「それはそうですが」

利左衛門は言葉に詰まったようだった。

「分かった、もういい。別に悪いことをしたわけではないんだろう。すぐに引き米に応じれば騒ぎにはならなかった。お前さんのせいで騒ぎが起きたわけではない。お前さんの主人がそれに応じなかったからだ」

「滅相もない。悪いのは私なんです。早めに納得させて置けばよかったのです」

「騒ぎを起こすつもりはなかったと言うのか」

「こんな大事になるとは思わなかったのです。名主さんが主人の所に来て話がつくと思っていました」

「どういうことだ」

「名主さんに頼まれて引き米に応じる形にもっていかうとしただけです」

「貸しを作ろうと」

「そこまでは考えませんでした」

兵助は一呼吸置いた。

「なぜ訴状を書いた」

「……」

「事件の処理は終わった。訴状は俺が預かって、表に出ることはないから本当のことを言え。そうでないと面倒なことになるぞ」

「申し訳ありません」

利左衛門は膝について謝った。

「頼まれて、つい書いてしまいました。もちろん地頭様に届けるつもりはなくて村役さんの所に置くよう言いました」

「虚仮にされたようだな」

「そうではありません。しっかり見てくれると思ったからです。うやむやにしたくなかったのです」

これ以上事を大きくするつもりはなかった。ただ真相をはっきりしておきたかっただけだ。吉兵衛に告げるつもりもなかった。

「利左衛門が訴状を書いたといつわかったのですか」

利左衛門を引き取らずと熊蔵が訊いた。

「書いたのは空左衛門さ。字は下手だったが文章ができすぎていた。勝右衛門でもなし、見たときに写したと分かったよ。ただ誰が書いたかは分からなかった。利左衛門と話していて確信したよ。これで終りだ」

利左衛門にはずるそんな所も悪意も見られなかった。銘々が思惑を引きずって別々に動いていくだけなのだ。水が低い所に流れるような見えない傾斜がどこかにある。誰もが気付かないだけなのかもしれない。

この編、完了。

さば神社

—

月が変わった。

新月と満月の日は、村全体で半日休みだった。

日の出で始まり、次の日の出までが一日だ。

日の出から日の入りまでを六等分する。それが一刻^{とき}になる。

同じように日の入りから次の日の出までを分ける。

昼と夜の一刻は、同じ長さにはならない。

明けの六つ、五つ、四つときて、九つが正午になる。八つ、七つ

で暮れの六つ。それから夜が始まる。

月は新月から満月を経て新月まで、それが一月だ。

月立ち（ついたち）から月籠り（晦日、つごもり）まで。

年は日中の長さによって、一番短い日、冬至から始まるはずだった。

冬至から冬至までが一年だ。

だが大昔に冬至を十一月にすることに決めた。干支によったというが、たぶん農作業がまだ片付かないのを嫌ったのだろう。

そのとき一年を十二ヶ月にすると季節があわなくなるのに気づいて、二、三年に一度、正確には十九年に五度、閏月を設けることにした。

いつ閏にするかだが、考えなくてもそれは幕府の天文方に類する

役所が教えてくれる。大の月と小の月もだ。

ただ理屈はこうだと兵助は思っている。

一月は二十九日と半日位なのだろう。だから大小の月が必要になる。

閏月は面倒くさい。

一年を夏至と冬至に分ける。春分と秋分がきまる。これで春夏秋冬、季節がわかれ、各々を六等分する。

二十四節気のできあがりだ。その節と中の、（最初と中間の）中が月の中に含まれない月があった時その月を閏とするということだ。正月節は立春だが元旦であるわけではない。年の暮れに節分をするときもある。

あくまでも新月の時が元旦になる

午前中かたづけをして飯を食べ兵助は、るいと墓掃除をしてきた人には休みが必要だった。村は平穏な日々が続いている。盗賊も喧嘩も火事もなかった。もちろん殺人や事故も。土に潜っている野ねずみのような幸せだった。餌をとりに出れば鳶に襲われ、狐に食われる。作物を作れば雹が降り、日照りが続く。僥倖に感謝するしかなかった。

だからといって、兵助が縮こまっていたわけではない。昼間から横になるささやかな喜びを満喫していた。

るいは縁側で繕いをしていた。日差しは強く緑の葉を濃くさせていたが、ときおり風が抜けた。それでも暑気が家を覆っている。

近在にさば神社がある。

それ程の規模はないが、川の下流域に十カ所ぐらいあって他所にないという。魚の鯖が由来という人もいるが、さばは「左馬」であるだろう。

源左馬頭義朝を祀つてある。

左馬神社は最初集落の小祠だっただろう。他の名前で川を見つめる小高いところにあつた。水害や疫病を退散させてくれる祈りを込めて祀られていた。村が落ち着き始めた江戸の初期のころだった。

その祠に義朝を合祀したのは誰だったのか。

この辺りは渋谷庄内であつたという記録もあるが、その南は大庭庄だ。

大庭氏の祖は鎌倉権五郎景正だつた。

後三年の役には源義家に従い、武勇の誉れが高い。

景正が伊勢神宮（内宮）に私領を寄進し、相模国司の免判をもらったのは長治年中（一一〇四～〇六）のことである。

が、大庭御厨が莊園としてなかなか認知されず、たびたび苦難に陥つた。

相模国庁の在庁官人が従来どおり諸種の課税、課役の負担を請求してくるのだ。

それが認められ落ち着いたあと、景正の死を待っていたかのように、義朝の大庭御厨への殴りこみがあつた。

略奪乱行とっていい。

義朝はこの年二十二歳。

在地の内紛に仲介者として入り、主従関係を結んでいく。

相馬御厨では千葉氏と上総氏との対立、近江では佐々木氏一族の対立の時に発揮された。

このときは、御厨の城内である高座郡鵜沼郷は鎌倉郡に属する公領だ、

という言い掛かりだつた。

天養元年（一一四四）九月、留守所、目代頼清の下知のもと、

義朝郎従、清大夫安行、新藤太ほか官人軍兵多数が押し入り供祭の魚を踏みつけ、大豆、小豆等を刈り取って持ち去り、生介神社神官、荒木田彦松の頭を打ち、来訪の神民八名を殴打し重傷を負わせた。

二回目は十月、総勢千余騎を繰り出し、境界の杭を抜き取り、作田九十五町の歩刈りの穂、下司家の私財、供米八百余石持ち去り、その上神人数名を簀巻きにして死傷させた。

在庁官人三浦庄司義明、中村庄司宗平、和田太郎助広らも従っている。

この件自体は咎められたが、これを通して着実に義朝はその勢力を広げていくことになる。

それから京に上り、十年後保元の乱をむかえる。

源平相乱れ、父兄弟を敵にして戦い、義朝は勝利者側につくが、親兄弟を処刑しなくてはならなかった。

三年後に平治の乱が起こり、今度は敗者となって逃亡することになる。

逃げる義朝は従者、鎌田政清の舅、野間内海荘の領主、長田忠致の屋敷に着く。

それまでに頼朝とははぐれ、朝長は負傷し動けないので殺してきていた。

先を急ぐが引き止められ、正月三日、湯殿に案内される。供は渋谷金王丸だけだった。

湯殿は屋敷から六町ほど離れた山あい法山寺の境内にあり、この寺は行基によって開かれ、本尊は薬師如来だった。

——湯帷子がない、

と叫んで金王丸が出て行くと、数人の男が義朝に折り重なり幾度も刺して殺した。

政清は酒宴のさなか、異変を察し、立ち上がったところ脛を斬られ、倒れると何人もが刺した。

戦いは経済の中に組み込まれている。

大きな権力が生まれなければどこまでも私的な争いが続けられる。疲弊した制度が覆され、完成した制度になるまで血の犠牲は繰り返された。

これが人間の歴史なのだろう。時代によつての生き様が試されるに過ぎない。

兵助にしても家族が殺戮の現場に立ち会えば、武器を持たずにはいられない。評価などは必要としないが、最低の生きうる地平がある。その中で生と死もあいまいな基準でしかない。

御霊^{みたま}信仰は宮廷に始まった。

滅ぼした相手の祟りを恐れた。

それに加えて疫神の呪符的要素を義朝に体现させた。

これも古い信仰だ。

飛び切り強くて残虐な武士がいい。それが同時に災害除けを兼ねる。

うつてつかけの領主が隣村にいた。

長田喜六郎忠勝、清右衛門白政の兄弟だ。

ともに家康に仕え鷹預かり、鷹場預かりとして旗本になっている。

従兄弟は古河七万二千石城主永井直勝である。

家康の曰く、

——長田は義朝を討たる逆臣の氏なれば、長田あらためて永井なるべし。

その弟、永井白元も相模国東俣野にも所領を持つ三千五百石の
身の旗本だった。

奇しくもこの川の流域に、義朝殺害の長田忠致の、正確にいえ
ば忠致の兄の子孫三人が地頭になつたことになる。

多分、忠勝が最初に義朝を祀つたように思える。義朝御霊に対す
る怖れと村民の長田姓への反感情を鎮めるとともに、災害除けの願
いを込めたと考えられる。それが徐々に下流域に広がっていった。

鯖については薬効とともに、疫病除けを加えて左馬神社に掛けた
のだろう。

強い武将にはその効験もあった。

その傍証になるか分らないが、支流の和泉川流域、和泉村のさ
ば神社の祭神は源満仲だ。領主は松平勝左衛門昌吉。

十八松平氏、能美松平だ。

そうすると同じ源氏でも義朝は傍系でしかない。

それを潔くとせず、祖の左馬頭、満仲を祭神にし、村の鎮守とし
て左馬神社を篤く崇敬し、松平家累代の祈願所とした。

武士は多く利害のために人を殺す。

そのほか面子、面目のため、代償の行為がないため武勇を競う。

それによって人というものは何を得るのだろうか。

降りかかる火の粉を払っただけなのだろうか。

通らなければならぬ道であるのだろうか。

朝廷にすれば、夷を持って夷を制する政策を続けていただけに過
ぎないだろうが、その夷の中に新たな仕組みと倫理が芽生えたのだ
ろう。

争いは人の本性に組み入れられているように思える。

無用な殺し合いにならないような仕組みができる。

無闇に百姓を斬ってはならぬ、言い分があれば百姓は訴えろという。

それが保証だ。争いが抑えられ、それを文化と呼ぶ。

殺しあうのは野蛮なことだ。生かさず殺さず、それが最良の施政だ。

それに甘んじる代わりに為政者の務めを果たしてくれ、というのが村民の願いなのだろう。

ある人が殿様の子に生まれるか百姓の子に生まれるのか、その子は選べないのだから、大きな意味はないのかもしれない。

他の人の生を生きることができないのだから、自分で精一杯生きることには意味はない。

皆が殿様でも困るし、適した人がその役目をすればいいのだろうが、それをどうやって判断すればいいのだろうか。

二

兵助は家に残って虫干しをかねて、書類の整理を始めた。

村役の仕事に人別改めなどの調査がある。

仏に階層があるかはわからないが、僧侶や寺院には階層がある。

それは世俗を映している。そして独自の権力を作り上げる。律令の大寺は官寺であり権力の保持を目的としている。権門として経済的基盤を持ち、現在に至っている。

また神も仏をよろこぶということにし、あるいはこの地では仏は神の姿をして現れるとする。

社僧（別当）が祭祀を仏式で挙行し、たいていの神社に別当寺が

あり、格式が高いとされた。

いま民衆と寺の結びつけは政治的に利用されている。

公の寺院は寺請制を施行し、その権能を所有しない寺院は庵である。寺と称しても住僧を住持とはいわない。住持は役人であつて、身分制度からはずれ、領主の安穩と武運長久の祈祷が義務付けられる。

寺請制の実状は、各家各人が切支丹やその他の邪教徒でないことを証明し請印することだ。それによつて社会的な生存を可能にして、同時に様々な経済的、労働的負担を負うことになる。その元になる書類が今兵助の作っている宗門人別改帳だった。

仏さえ取り上げられ、疎まれていると感じるようになる。

実際なにを望んでいるのだろうか。 仏のことなど語る資格は兵助にはない。

どこの寺の檀家になるかは、村民の勝手だった。だから村民がどの檀那寺であるかを示す書類を作らねばならなかった。それも村役の仕事だった。

大部分が四つの寺に分類された。地域と宗派、先祖の問題だった。檀那寺を変えることはほとんどない。寺との関係は信心というより交際のようになっている。僧は人格的な威厳があつた方がいい。厳しい修行は精神的、肉体的な威光をもたらすはずだ。仏になろうとしている人でなくてはならない。

虚像なのかもしれない。観念で思い浮かべただけのものに過ぎない。だがその表象は何かを暗示している。

火を取り出す人がいる。しかしそれはあやかしに過ぎない。燃えたとしても、それが意味をもつわけではない。火打ち石を打てばいい話だ。自然は肉体にあつて、精神は肉体に宿る。兵助には悟ることはできない。

「はかどつていますか」

と、るいが訊く。

「もう終わるよ」

と答えた。

念仏の教えは、南無阿弥陀仏と唱えれば浄土へ往けるということだ。それだけだと、兵助は理解していた。

子供たちも戻ってきて食事になった。子供たちには子供たちの仕事があつた。農家では子供も働き手だつた。言われたことをやるだけだったが、いつも遊んでいるわけにはいかなかった。友治と団治を連れて、伸びた垣根の枝を刈つた。敷地の草取りも二人の仕事だつた。

組頭の源右衛門が来たのは、七つ刻だつた。

世間話というわけではなさそうだつた。

定右衛門のところが分散するという。

破産だ。近年思わしくなかったのだが、この間の嵐で畑がやられ、今年の年貢も払えないという。組で助けもしたが田も質に入り、どうにもならない状況で、財産を整理して借財に当てることになる。

兵助にできることは、書類を作ることだけだ。

あと、御林の立ち入りは禁止になっているのに、薪を刈る者がいるので取り締まってくれという依頼だつた。源右衛門の新開畑の先にあたるので、気になるし自分が疑られるのを懼れたかもしれない。この場合、村民全員の念書をとることになる。当事者とそれを見逃した者への罰則規定も盛り込まれるだろう。

村の林の多くは入会地になっている。生活に必要な下草や薪を刈ることになる。畑に開発する時は地頭に冥加金を払って権利を得る。

御林は幕府の直轄地で、村で管理されている。村境に残された土地だ。

源右衛門は兵助と同年代で昔からの知り合いだった。律儀な男で、顔つきまで厳つい。それでも親しい者には軽口も叩く。用件を片付けると雑談になった。

「近ごろ女房の様子がおかしい」と云う。

家事は普通にこなすからひどくはない。源右衛門は大げさに言ったりする性格でないので、本当に困っているらしかった。

「どんなことがあるのかい」

「それが難しいのは、これということがないのだ。例えば気がつく、と、ふつと後ろに立っているとか、土間にいたはずなのに勝手に上がっているとか」

「それでは、どちらがおかしいか判らないな」

「説明するのは確かに難しい。一度家に来て女房と話してみてくれないか」

「家族のものはどう言っている」

「聞いて見るわけではないのだが、子供は何も感じないらしい。ただ、お袋が首をかしげていることがある。親父は気が付いていない、と思う」

「話していて変だと思うことはあるのかい」

「内容はおかしくないのだが、違う人と話しているような気がする」

「お前さんのほうがおかしいように聞こえるな」

「はつきり言って、それならそれでいいのだけれど、悪いことが起きなければいいがと思うのだ」

「わかった。あしたでも寄ってみることにするよ」

「助かるよ、昼過ぎなら女房はいると思う」

困ってはいるが深刻というわけではないのだろう。

いやな予感がするらしい。

兵助はなにも感じなかった。ただ冗談にするには源右衛門の顔が暗かった。

誰にでも一つや、二つの悩みはあるし、家庭の事情というのもある。社会的に立派な人が家で疎んじられていることもあるし、逆もある。

源右衛門の親は隠居をしているが、まだまだ元気で仕事もしていた。子は三人で女房はかねといった。奉公人も二人いるはずだった。村の中でも恵まれた方だし、羨む人もいるだろう。かねは隣村のやはり村役の家から嫁いできた。村はある意味運命共同体だから、ほとんどのことは誰でも知っている。一つの家族のようでもある。

源右衛門はかねの何かを恐れているのだ。取り越し苦労であればいいのだが、多分そうだと兵助は思っていた。

三

次の日は風が強く涼しかったが、急激に天気が崩れるかもしれない。ただ雨が落ちても続きはしないだろう。一番心配は嵐がくることだったが、風向きが違った。雲がどんどん東の方向に流れていた。手を広げないで、一日でこなせる作業をするよう平左衛門に伝えておいた。

昼まで仕事をして、るいと家まで戻った。

るいには詳しい話をしないで入村の源右衛門の所へ向かった。変なことを勘ぐる奴もいないだろう。

入村は近い、寺の横を過ぎればもうその集落になる。入り口に高札場がある。辻の先が源右衛門の屋敷だった。敷地は道に面して兵助の家とは反対側になる。

突風が吹いて土埃を叩きつけた。

家は鉤型になっていた。隠居部屋を増築したのだろう。開いている潜り戸から内に声を掛けると、返事をしながら奥から「かね」が出てきた。水を使っていたらしく布で手を拭いていた。

兵助は言葉を用意してこなかった。だから詰まってしまって、かねを見つめることになった。髪に手ぬぐいを巻き、きちんとした身なりの女だった。表情に不自然な所はなかった。

「なにか」

と最初にかねが言った。

当然そういう展開なのだろう。兵助が何か言わなければならない。「少し手間を取らせるかもしれないが、話を聞かせてもらえるかな」かねはまごついた様だったが、とりあえず

「どうぞ」

と言って兵助を中に入れた。もちろん兵助を見知っていたからだ。が、まごついているのは兵助の方だった。

「どんな御用ですか」

と、土間に入るとかねは尋ねた。

兵助はどう切り出すかまだ迷っていた。

「きのうご主人がみえて、それで来たのだ」

「そうですか」

と言って、かねは奥に行った。

湯呑みを持って戻ってきて、上がり框かまちの上に置いて勧めた。

髪の手拭と前掛けは取っていた。

兵助は框に腰掛けた。かねは立ったままじっとしている。

「いただきます」

と言って、茶を一口含んだが、考えはまとまらなかった。

「藤左衛門の所の畑はそんなにひどいのかい」

「確かにそうなのですが、藤左衛門さん不幸が続いて、やる気が

失せてしまったようなのですよ」

「そうだな、この三年で親と女房を亡くしているからな」

「娘さんは嫁いでいるからまだいいのだけれど、若い衆は二人とも手伝いに出ているようですよ。うちの人も親身になって面倒はみただけれど……」

「娘も心配はするだろうが、どうなるかな。本人がしっかりしていないと」

「辛いですね」

と、かねは顔を曇らした。

「ところで、お爺お婆は元気なのかい」

「どうなのでしょう。家にいても仕様がなないので畑には行きますが、古い畑だけで手一杯のようですよ。もちろん健康ですよ、よく食べるし」

微妙な感じだが、裏の畑を二人で管理しているとしたら大したものだ。

兵助もそうありたいと思った。それが人として幸せなことだ。籐左衛門だってそう願っているはずだった。働けるうちは働いて、天命を全うしたかった。かねは何か不満があるのだろうか。

兵助は立ち上がった。

「手間を取らせたね、最後に御林のことだが、出入りしている者に心当たりはあるかな」

かねは少し考えていた。

「多分、島津の人たちだと思いますが、はっきりはわかりません」

「見かけたのかい」

「刈られている場所です。家の畑を通るのは不自然で、島津の方から入ってきています」

礼を言つて兵助は引き上げた。

かねは人の見えないことに気がついてしまうのだと思った。相手に緊張を強いるのかもしれない。

外に出ると空が黒くなっていた。風は止んでいる。雨がぽつりと落ちてきた。

そのとき角を曲がって、ちよが早足で歩いてきた。
この娘はいつも弾んでいるな、と兵助は思った。

「ちようどいい所で会った、寄ってください」

と足踏みする感じで言った。

それで付いて行くようになった。大きな籠を背負い両手で荷物を抱えている。勘助の所に馬はない。

「雨が来そうなので先に戻ってきました」

首を少し曲げて話し掛けた。

八坂社は入村と久保を分けている。すぐ近くだった。

ちよは荷物を下ろすと湯を沸かしていた。家は無人だった。振り返りながら色々と喋っていた。母親が会って礼を言いたいこと、勘助や姉のなよが明るくなったこと、熊蔵が手伝いに来ること、地震にびっくりしたこと……。

兵助は子守唄のように聞いていた。框かまちに腰掛けて、茶をもらった。雨は音を立てて降りだした。

「もよから便りはあるかい」

一度あったと言う。短い文で、迷惑をかけて申し訳ない、元気にしているので心配しないように。家に戻ることはない、と書かれていたらしい。

「でも姉さんにはきつと会える気がする」

と、ちよは言った。

「がんばっていれば」

「そうだね、くじけてはいけない」

「もうすぐ七夕ですね」

ちよは遠くを見るように言った。ちようどそのとき稲妻が光り、顔を見合わせると雷鳴がした。驚いてちよは蹲すくり、そのあと照れたように笑った。それから框かまちに腰掛け、二人で外を見ていた。

「ところで、源右衛門のところの嫁はどんな人かな」
「怖い人」

具体的には何も言わなかった。悪口になると思ったのだろう。

雨は半時も経たずに上がった。

しばらく雨がなかったから一息ついた格好だった。そのまま降っていれば、人々も家に戻ったかもしれないが、ひと時休んで作業を続けているだろう。兵助もここでいつまでも休んでいるわけにはいかなかった。

次の日は施餓鬼^{せがき}に寺へ行った。

叔父の兵太夫の年忌にあたるので卒塔婆^{そとば}を書いてもらい、お経をあげてもらった。

叔母の「かの」と二人で行った。亭主を亡くし哀しみはあるのだろうが、昔のままで生き生きとしていた。息子も跡を取り、安心もしているだろう。亡くなった親父とは仲の良い兄妹と聞いているから、兵助のことを不憫にも思っていただろう。

寺の住職との話になり、祖父の祖父が先祖の菩提寺として照浄院を建立したという。寛文年間のことらしい。

それには四人の人物が関係している。

まず無住だった寺に芝増上寺からやって来た善雲住持。

慶安二年（一六四九）五石三斗の朱印寺になったからだった。

そのとき随行してきたらしい正雪。

先祖といわれた七右衛門。それに祖父の祖父伝太夫だ。

寺には素人彫りの如来立像がある。

それが当時の本尊とされていたかもしれない。

その墨書には、

「守本尊 正雪の戒名菩提 万治三年（一六六〇）八月十五日の書

七右衛門 戒名 花押」

と銘されているらしい。

正雪は善雲の庇護者であっただろう。七右衛門は正雪の徳を慕い立像を作らせ、念仏を唱え守ったと思われる。そして自分の死期を悟り、善運に立像を託し、重ねての供養を願った。

後代になって、それを聞き知った伝太夫が七右衛門を偲び、菩提を弔うために阿弥陀如来の像を造り、庵を建立したのだろう。それを寺の末寺と住持が認めた。

寺創世の頃の話だった。

その後だいぶ経って、格式に応じた本尊像が名のある仏師によって造られることになる。

叔母は感心して聞いていたが、兵助にはうまく理解ができなかった。正雪と七右衛門の関係がよくわからない。

「正雪は僧侶だったのですか」

「そうではないように思えますな」

「ということは、なぜ住持に随って来たのでしょうか」

「因縁かな」

と住職は微笑んだ。

その因縁に七右衛門も感染したのだろう。

平左衛門が呼びに来た。源右衛門が来っていると伝えた。

上り框に腰掛けていた源右衛門はひどくやつれていた。心労で体までおかしくなっているように見えた。

「眠れないのだ」

と振り絞るように言った。

「何が心配なのだ？」

「おかしい事が起きるのだ。今日も奉公人を里に帰すので給金に一分金を渡そうとしたのだが、数が合わない。それを女房に言って、

振り返ると足元に一分金があつた。呪われているのではないかと思うんだ」

「誰が誰を呪うのだ」

源右衛門は考えているようだった。というより迷っていた。

「女房に狐が憑いていまいか」

首をうな垂れようやく言った。

何かが憑いていないとも言えない。ただ兵助が会った時はわからなかった。そんな憑きかたがあるのだろうか。自分でそれをあしらえるとすればそれは能力だ。人に悪さはしないだろう。邪悪の意思など想像できなかった。そんなものがあるとすれば、とうにこの世など終わっているはずだ。

人はたやすく死ぬ。生れる前から死に、生きているのが僥倖のようだ。反対に言えば生きていることで何かを殺しているのだ。怖いのは人で、幸せであることは辛い。

「屋敷に稲荷の祠をたてればいい。家族で祀ればいいんだ」

「それで収まるだろうか」

「収まるように祈ればいい。鎮まるはずだ。神は現れるが姿を見せない。小石でも置いておけばいい。ただし供え物を欠かさずに、毎日自分たちが食べるものを捧げ拝むことだ」

源右衛門は納得したのか、しなかったのだろうか、礼を言って帰っていった。

あのままでは命も危ない。

庚申様のお日待ちに出かけた。宗教的行事というより寄合の慰労親睦会になっていた。若い衆は来ない。

戸主である年寄り連中が集まる。夕飯の終わったあと五つ半刻につまみや酒を持ち寄る。本来は由来があるのだが世間話や昔話をし、共通の話題にする。共有する知識とっていいのだろうか。

源右衛門は祠を建てたようだ。

毎日熱心に拝んでいると言う。

「そんでもってよ、嫁やお爺、お婆まで勧めるもんだから、大変難儀だとこぼしていたっけ」

と向かいの爺さんが言う。

「そりゃ罰があたる。神仏は大事にしておかなきゃだめだ」

「そんだけんど、源右衛門とかあ、ごうつくだべえ。いまさらどうしたかってことさあ」

人には色々事情がある。

神仏によって本人が救われるとするなら、それはそれでいいのではないかと兵助は思う。

どうにもならないことは誰にもあるよ、と兵助は言いたかった。ただ弱みに付け込んで、それを商売にしたり騙している連中が多すぎるのだ。現世のご利益を願うのなら同じムジナ、と言えなくはないけれど。

佐右衛門が寄って来て、助郷の人選でもめごとがあるという。

村の道は自分たちで普請した。若衆が主にやることになるが整備し管理した。

街道は知行主に負わされていた。

結局割当てを村役として村が負担することになる。これは金で決

済されるが、大きな街道は道中奉行の管轄で助郷の制度があった。

例えば東海道の戸塚の宿の代助郷に村はなっている。

近場の宿、藤沢、戸塚には百人の人足と百頭の馬がいて、次の宿へ荷物を運ぶことになっていた。

それで足りない分の人馬を助郷の村から出すことになる。

大きな行列があれば当然足りなくなるので近くの村に何名との割当てが来る。それに従って村人は時間までに出頭することになる。

荷物を運べば手間賃をもらうことになるが、問題は日を選べないことだ。農繁期でも働き手を出さなくてはならない。その代わり中原道の助郷からは外れていた。

「順繰りにはいかないですよ」

要するに奉公人を使っている家では人足を出すのにそれ程の負担はないが、家族でぎりぎりやっている家は人足に取られたら差支えるということだ。

「大きな支障が出るようなら嘆願を出すようだが、何とかやり繰りしていくより仕方がないんじゃないのか。ご苦労だが骨を折ってくださいよ、頼みます」

兵助はそう言うほかない。

「原則は全戸でということだが、不満の出ない程度に割振りしても構わないんじゃないかな。任せますよ」

境川には村域に三つの堰がある。

その内の島津堰普請にさいして土取り場をめぐり、堰下三十六戸の農民が地頭に訴えをしたことがあった。

本所の屋敷に向いたところ、たまたまそこに寺の住職が居合わせ仲介してもらった、と言われたが実際は少し違う。

集団での訴えはそもそも認められないのだから、調停する住職が

いなければ初めから成立しない話なのだ。

問題は島津堰が大破しているので多量の土を必要としていることと、堰普請は本家分家領問わず、堰を利用する部落で行なうことだった。

本所様の御林からだけの土で作ってはまずいと考えられる。

本所、番町両屋敷の協力が必要なのだ。

寺の裏の諏訪山と呼ばれる御林の一部が崩れたのが発端になる。

もともと堰の土取り場に苦勞していたので、そこを利用させてもらえないかと考えたわけだ。御林は入会い地になっているが復旧できないので、危険でもあった。

住職はそれを知っているから、村人と話しあい、先に屋敷に出向いていたことになる。

結局、両地頭から一反ずつをそれぞれの御林内から下さることになった。それを三堰で分けた。その取り決めの連印証文を兵助が書くことになった。

「今年も出てこない連中がいました」

これも全員参加が原則だが、一家で一人出れば間に合うことになる。前に問題になったのは参加して飲み食いしながら仕事を手伝わない者がいたことだった。細かいことを言っていたらいろいろと問題が出てくる。それより一番の問題は皆がばらばらな考えを持って、共同の在り方が崩れてきてしまっていることだ。

「強制することでもないだろう。話をして参加を促してくれ。聞かない者がいたら知らせてくれ、話してみるよ」

堰を利用していない、と思うものは田を持たないものでもあるが、村の一員であることは間違いない。村民であることの共同性が薄れている。

「最後に、並木内の畑の事です」

本当はこの事を相談したかったのではないだろうか。

延宝期までの開発は、本畑の地続きに切添えされ耕地化していった場合が多い。費用も余りかからなかったろうし、年貢も低く設定されたから採算の取れる事業だった。が、それも大半が開発し尽くされた。

以後の開発は少し事情が変わってくる。

享保九年（一七二四）徳右衛門は、番町方の領地の開発を申し出る。領主とすれば徳右衛門が本所様の名請け人でも江戸の町民でも構わないということになる。

要するに八十両で土地を買った。

当然そこから年貢を払うことになる。相場より少し安いかもしれない。新開完成耕地を小作地として貸し付けることに成功すれば問題は無い。しかしうまく行かない時もある。

久右衛門らが請け負った大野の開発も細々と続けられているに過ぎない。これもいずれ手を打たなければならぬだろうが、それよりも兵助に託されていたのは沢柳原並木の内と呼ばれる土地のことだ。もう最初誰が開発に入ったかも分からなくなっている。

——その方両人役儀相勤めるうち、預けるので開残し跡、改発すること。

荒地になっている土地をかつてのように耕作できるようにしろということだ。

といっても殆どは手が付けられていない。

両人と言うのが兵助と佐右衛門になる。

年貢割付け状では高が七石五斗八升、反別が五町一反余。半分から組頭の給分をだし、後半分の年貢、七百四十四文は兵助が負担しろと言っている。兵助の給金の半分だ。それでも兵助は六反ほど畑にした。あとは少し難しい。荒地のままになっている。誰か本格的に係わる者がいなくてはならない。

「例え開発しても権利が生れないのではないですか」

「開発すれば冥加金は負けてくれるだろう」

「やはり割に合わない」

佐右衛門は納得しない。

確かに組頭でいるときは預けられているとして、その後はどうなるのだろうかということだ。兵助は年貢分くらいは収穫しようとしただけだ。兵助分のほうが条件はよかった。佐右衛門は殆ど一家で三、四反開墾したが取り分はどうなっているのか。

「地頭は一種過料のように考えているのではないかな。開拓を許可したのに進んでいないのは村のせいなのだという風に。当然入ってくる年貢を村役で負担せよ、と」

「勝手なご言い分に聞こえますね」

畑に手が入らなければすぐ荒地になってしまう。人がいなくなれば地頭の所に年貢は入ってこない。近隣村の耕地開発が進めば条件の良し悪しが小作地の貸付値段にも影響する。江戸に奉公に出る者が増えれば、人も足りないし、給金も上がることになる。新規の開発も割が合わなくなってきたのだ。

「あまりまともに考えない方がいい」

反対に言えば村民に少し余裕があるということでもある。ぎりぎりではあるが、前に比べれば何とか耐えられるようにはなっている。

今はだ、これから先は分からない。

と、兵助は思った。

この編、完了。

さば神社（後書き）

さば神社関連の図書、参考にさせていただきました。
今、手元ないので追って、詳細は発表します。

自害

—

田植えが終わってしばらくしたころのことだった。
熊蔵は、兵助のせがれ常吉と川のほうへ歩いて行った。
常吉は、どういうわけか熊蔵を気に入って、弟分のように接していた。兵助は熊蔵の上役だから家に顔を出すと、時間があれば寄ってきて話をしながら、そのまま付いて来たりした。

川はざわざわと流れ、堰の下でごおつと響いている。魚が赤い腹を光らせて泳いでいった。

小川のほうに子供たちが集まって、えびでも取っているのか時々歓声が聞こえる。

こんなのにのんびりしたのは久しぶりだ。
ただ千代のことか思い浮かぶと胸がどきつとする。
常吉も思いにふけっているようで何も喋らない。

「一休みだな」と呟いた。

「なんだかほつとするね」と常助は答えた。
そして小石を拾って川に投げた。
駆け出したい気分だった。

翌日午前、早飛脚で書状が届いた。

下鶴間地頭、都筑氏からのもので、村役人兵助への依頼であつた。

下鶴間村名主、嘉右衛門宅で妻が自害したので事情を取り調べ報告としてほしい、という内容だつた。

用人が多忙で来村できず、急を要するのですぐ取り掛かるよう付け加えられていた。

兵助が見込まれたらしい。

常助が迎えに来て、熊蔵に付いていくように伝えた。

名主の家の問題でなければ、当然その村の役人が調べることになるが、当事者であるので憚れたと思われた。嫌な感じがしたので断りたかつたが急ぐことでもあり、辞退できそうもなかつたので引き受けることにした、と兵助は説明した。

近年とくに地頭は領主経営に不熱心になつてゐる。幕府のお触れでさえ洩れることもあり、近在の村から知らされたりした。もちろん知らなかつたということでも許されるわけではなく、不利益をこうむるのは村民だつた。

下鶴間村は北隣の村で都筑氏と江原氏の二百石ずつの相給支配となつてゐた。正確に言えば幕府の直轄地として残されてゐた九石五升が松平氏に与えられてゐたが、集落は大きく分けて北が公所、南が目黒（山谷、宿）となつてゐて、別村の如しといわれている。

嘉右衛門の住む「宿」は名の通り大山道の宿場町で旅籠が立ち並び、東海道の脇往還として継立村になつてゐた。また市が立つてゐたときもあり手広く商いをする者もいて、公所や熊蔵の村とは違つた氣風が育つてゐた。

午後、兵助は玄運に同行を頼み、熊蔵を連れて下鶴間村に向かつた。

急ぐと少し汗ばむような暖かい日だつた。

嘉右衛門の屋敷は立派な門を持ち、広く高い板塀に包まれている。半開きの戸を入ると良く手入れされた庭が見えた。もともと「宿」

の家並みは間口は狭いが奥行きのある敷地を持っている。門前で熊蔵は風聞を調べるよう命じられた。

兵助たちは、事情を述べると座敷に案内された。畳敷きで真新しい建具と品のいい調度が揃っている。

さっそく嘉右衛門が現れ、挨拶をした。痩せぎすだが骨格のしっかりした顎の大きい、五十位の温和そうな人物だった。ただ事件の衝撃が顔を暗くしている。

妻の志のが一昨日の昼過ぎに倉で首を吊っていたという。

「詳しい話は後で聞くとして遺骸はどちらにありますか」

できるだけ兵助は事務的に言った。

「ご検分があるとは承知していましたが、そのままにしておくには忍びず、運び出して仏間に安置しております」

「お悲しみのところ申し訳ないが、こちらの玄運は医師ですので、ご案内いただいて見分させていただきたいのですが」

「どうぞ」と、嘉右衛門は立ち上り廊下を通って奥の部屋に案内した。

仏壇の前に布団が敷かれ顔に白布を掛けられた遺体が置かれていた。

兵助は枕もとで合掌し、一通り検分すると、

「ここは医者に任せて現場を見せていただけますか」

と言った。

嘉右衛門は頷くと土間まで戻り裏の倉に案内した。勝手口を通り、かなり広い裏庭を右手に見て進んだ。左手は開けていて長屋風の小屋や物置などの小屋がある。木戸を抜けると小道が三方に続いている。右手にしっかりとした土蔵が見えた。

錠を外して戸を開くと、正面の上方に明かり取りがあつた。書類を入れてあるのか行李が整然と左右の棚に積まれている。奥に二階に上がる梯子があつて、真中に太い梁が渡っていた。そこに紐を張って首を括っていたという。

梯子を上り梁に紐を渡し、きつく端を縛って首を入れ飛び込んだというのだろうか。

それとも踏み台でもあって、それに上り足を外したのだろうか。

兵助は梯子を上って階上と梁を見て戻った。

「使った紐はどれですか。それに踏み台でも残っていましたか」

「紐は腰紐を持ち出し二本は梁に掛け、一本で着物の裾を結んでいました。踏み台はいつもここに置いてありました」

「遺書はありましたか」

「見つかっていません」

「分かりました。ここはこれでいいでしょう。ではお話をお聞きます」

部屋に戻ると玄運がいたので引きとってもらった。

「お手数掛けました。帰ってから報告を聞かせてください」

と兵助は伝えた。

玄運が引き上げると嘉右衛門は話し始めた。

どう話すか考えていたような感じだった。

「当日私は寄り合いがあつて朝から出かけていました。八つ半ごろ家人の弥七が駆けつけまして、すぐ戻りました。発見したのは下女のお菊でした。昼食にも出ないのでおかしいと思つていたようでしたが、一段落したので探すのでもなく、見て回ったそうです。すると文庫倉が少し開いていたので不審に思つて覗くと志のが死んでいたそうです。それですぐ私に知らせに走りました」

そのとき女が茶を運んで来た。

「どうぞ」と茶を勧めて、嘉右衛門は話を続けた。

「すぐ自害だとは見て取れましたが、自分が村役人なのでどうしたらいいか迷いましたすえ、あまりに不憫に思い吊るされていた遺体を降ろしました。それからすぐ地頭様にお知らせした次第です」

「原因の心当たりは」

「心身の不調を気にしてだと思われます」

嘉右衛門は落ち着いていて、しんみりした調子で話した。ここで立ち入ったことを聞くのを兵助は断念した。

「心中お察しいたします。地頭様にご報告しなくてはなりませんので、お調べは続けさせていただきますが、まずは葬儀を済まされるのがよろしいかと思えます。ご家族ご家人から事情を聞くことになりますので名を控えておいてください。それに外へ出るものがいたら届けてください。今日はどうも失礼いたしました」

「かたじけなく存じます」

そう言つと、深々と頭を下げた。

門まで見送られて通りに出たが、しばらく行つて立ち止まった。

熊蔵が脇から出てきた。

「どうも奥方は気が触れていたようですね」

熊蔵は楽しそうに言つた。

何か気配を感じたので辺りに目をやり、兵助は歩き出した。

熊蔵はついて来る。定使い（小歩き）は田畑二反、二反を持つ名請け人だった。村役人の下使いをして世襲だったが屋敷地はなく役人宅などに住んでいた。ただ時代が降つて地頭から四俵の扶持をもらう下役になつて家を持つようになっていく。先代の熊蔵は早くに妻を亡くし男手一つで熊蔵を育てた。熊蔵は小さいころから物怖じしない人懐こい子で、親父が寝込んだので十七、八からこの役をしていた。

「それで、どこでネタを仕込んできた」

山王社の先に出て人家もまばらになつた所で兵助は尋ねた。

「へい、同業でも江原の殿様の方へ聞きに行きました」

確かに嘉右衛門に仕えている身では話しくかう。

「あの家の評判はあまり良くないようです。たぶん金を溜め込んでるせいでしょう。やつかみというやつで、それで奴も喋りだすことになる」

早足で歩いているので込み入った話はできない。

噂を聞いているのだ。

「何でそんなに儲けてるのだ」

「なんでも山を集めているらしいですね。もともとは田畑を奉公人に耕させて、増やした土地を貸して小作にしているようですが、儲けで山林を買い始めたといいます。材を刈ることもそうですが、焼いて炭にして売るのだそうです」

地頭と話がつけば、うまい商いになりそうな気はする。

「名主は座っているだけですが、差配のものが二人いてそれが威張っているということです。今はちょうど時期で雇いの木挽きや炭焼きが荷を運んできて忙しそうですよ」

荷も人も見かけなかったから荷を出し入れする横口があるのかもしれないな、と兵助は思った。

「嫁さんは恩田村からやって来てやはり名主の娘だそうです。子は男が一人に女が二人で、上の娘は江原様の村役の倅に去年嫁いだようです」

それで避けたかな、と兵助は思った。

詳しい事情は知らなくても地頭は相給の村役人を使わなかった。差し障りがあると思って隣村の村役人に依頼した。江戸で言う株仲間のような横の連帯があるのかもしれない。

「それでその嫁さんですが、どうもおかしいという噂が出始めたのは去年の春頃だったそうです。普段は変わりないんですが、突然ものに憑かれたようになるようです。近所の葬式に出たとき気が触れたように叫びだし、異様な声で話してから気を失ったといいます。それから外に出ることはなくなったのですが、出入りする者が洩らすことによれば収まっていなかった、ということのようです」

一通り話し終えたと見えて熊蔵は黙った。兵助は頷いて聞いているだけで口を挟まなかった。しばらく無言で歩いた。家はもうすぐだった。

これが殺しとでもいうなら内部の詳細を是が非でも探らなければ

ならないが、自害なら深くえぐり出す必要もないように思えた。そうしてくれと暗に嘉右衛門は言っている様子にも感じられた。

「一緒に来てくれ」

と兵助は言つて、玄運の所に寄り、呼び出して外で話を聞いた。

「縊死です。首に太くない紐の痕のようなあざが残っているだけで他に外傷はありません」

「他殺の線はないかな」

「ほとんど考えられないですね。ただ叫び声を聞いたり抵抗した跡があれば無理やりということにもなるが、それでも争えば手や顔に傷がつくはずです。新しい傷や打撲はありませんでした」

着物の裾を紐で結んだのも、たしなみなのだろう。

ただ踏み台の上で裾を紐で結ぶのも簡単ではない。自害をしたのは確かなのだろうか手助けをした者がいたのかもしれない。切腹でも介添え人はいる。罪になるわけではないが、もし自害の意思がないとすればどうなるのだろうか。書状を見たとき嫌な予感があったのはこういうことなのだ。事実を明らかにしても碌なことにならない。

玄運に礼を言つて書類にするよう頼んだ。

「どう思う」

熊蔵に訊いてみた。

「何かに憑かれて突発的に自害を図った、ということなのでしょうね」

急に元気を無くしたように熊蔵は答えた。

「葬式の様子を見に行つておいてくれ。書類を作るのはその後だ。今日はご苦労様、戻つてくれ」

兵助は最初から気が重かった。勢いをつけて出かけたが余計気が重くなっていた。形だけのことなのだ、と思い込もうとするのだけれど得心しなかった。そのとき次第だ、と覚悟を決め、それで考えるのを止めた。

翌日、嘉右衛門から名簿が届いたが一目見て放って置いた。三、四日して熊蔵が来た。葬式が終わったらしい。

「それでどうだった？」

「盛大なものでしたよ。どこから人が集まるのだろうというぐらいでした。坊さんも何人いたのやら」

熊蔵は素直というのだろうか、しきりに感心していたが、とぼけたところもあり、冗談めかすが曲がったことは嫌いだった。

「徳兵衛さんはじめ村からもけっこう出向いて来ていましたね。一通り見て回ってから方々、聞き歩いてきましたが、これという話はありませんね。気を病んで自害したということは皆言いますが家族の仲は良かったようです。あんな大尽でも、悩みがあったのかという感じですね」

周りでは深く悲しむということもないだろう。

ひそひそと自害らしいよ、と他人事で囁きあうだけだ。可哀相に勿体無いと、遠くから言葉を投げかけるのだ。なにか因縁があると判じる者もいるだろう。

「奉公人に話は聞けたかな」

「出入りしている人足と話しましたが、屋敷の方には近づけないようです。家族の顔を見ることはないと言ってました」

「番頭のようなものが二人いるんだな」

兵助は改めて届けられた名簿を見た。片右衛門と源之助とある。

「一人が田畑の差配で、もう一人が山の方みたいです。もともと百姓で家から通っています。その下に手代のような奉公人が二、三人いて、倅は体が弱く外の仕事はしていないようです」

屋敷にいる奉公人は男が八人、女が五人と記されている。奥の女

中はお菊、お春とお仲。あとの二人は若く手伝いのようだ。

「嘉右衛門に浮いた噂はないのかい」

「それは聞きません。滅法堅い人で嫁さんは大事にしていたといいます」

そんな感じではあつたな、と徳治は思い出していた。辛そうにしていた。志のは四十一、まだまだ先はあつたのだ。

「明日四つから取調べをすると伝えて、近くの寺を借りておいでくれ。最初はお菊、次は弥七、それから片右衛門。午後の分は追って知らせると。おれが筆記するからお前が調べてみる。名と年、仕事の内容と当日の行動、それに気付いたことを訊けばいい。できるだけ丁寧にな。おれも気になることは口を挟む。分かつたな」

三

寺は本堂脇の一部屋を借りた。書付ける台もあつてちょうどよかった。

三人は本堂で待っていた。まずお菊を呼んでもらった。

「菊と申します。年は二十八、下女でございます。あの日はお春さんと昼の支度を終え、お高とお峰に畑へ運ばせました。若旦那の膳を下げましたが女将さんの膳がそのまま、部屋にもいないので、どうしたのかと思ひながら台所に戻りました」

「膳を運んだ時には女将さんはいたのですか」と、熊蔵は訊いた。

お菊は小紋に丸鬘を結って百姓の下女には見えなかった。先日茶を持ってきた女とは違った。

「それが、だんな様を送り出してから具合が悪いとおっしゃって休んでおられたので、声は掛けましたが返事はありませんでした」
「勝手に食事をしたのは誰ですか」

「お嬢様とお仲さんに私とお春さんです。それに弥七さんが後から来ました」

「それでは屋敷にいたのは家族三人とあなた方四人になりますか」

「あの日は荷を捌くのに忙しくて皆、向かいの作業場の方に行ったきりでした。それで食事を運ばせたのです」

「それではその後のことを聞かせてください」

「もう一度女将さんのところに行きました。膳がそのままでしたので声を掛けて、奥に進むと床も片付けられていて誰もいませんでした。前には床が敷かれていたのに、おかしいなと思いながら膳を下げてお勝手に戻りました。お春さんにそのことを話したのですが、放っておきなさいと言われて。というのも女将さんは気が立って大声を上げたりすることがあるので、そのときは声を掛けず見ないようにしろと言われていたからなのです。」

それでも気になって一人で屋敷を見て回りました。若だんなどお嬢様にお聞きしましたが知らないと言うことでしたので外に出てみました。裏のあの倉の前を通ったとき錠が外れているのに気付きました。何でこんな所だと思って、女将さんと呼びながら戸を開くと正面に首を吊っている姿が見えました。たぶん叫び声を上げたと思います。が立っていらなくて腰から崩れてしまいました。

一瞬だと思えますが動けなくなつてぼうつと眺めていました」

「そのとき女将は動いていたかい」

「後ろから光があたつて陰になっていましたので詳しい表情はわかりませんが、体は揺れていませんでした。事切れていると思ひました」

「では続けて」

「弥七さんが駆けつけて来て倉の外へ引きずり出されました。そのときになつて正気付いたようで、大変なことが起きたと思いました。そのあとお春さんとお仲ちゃんが来て、それから弥七さんが旦那様に知らせに行くから倉の前にいて中には人を入れないように、といつて出かけていきました」

「弥七とお仲はそれまでなにをしていたんだい」

「弥七さんは庭木の手入れをしていて、お仲間ちゃんはお嬢さんのお相手です」

「若だんなの具合はどうなんだい」

「もうお医者様にも掛からずに、良くなつてきてご本を読んでいらしゃいますが激しく動くのは無理な様子です」

「なるほど」

と言つて、熊蔵は兵助に振り向いた。

口を挟まなかったから何か他にという感じだった。

お菊は勝気だが正直そうな気がした。嘘はついていないだろう。

「午後からお春とお仲を呼んでおいてくれ。下がっていいよ」

と兵助は言つて口述の認めだけもらった。

次は弥七だった。

「年は五十三、下男です。あの日は主人のお供で松葉屋さんまで参りました。帰りは夕方だと言うので、近くですので一旦屋敷に戻りました。やりかけだった庭の手入れをしていると、女の悲鳴が聞こえたので裏へ回りました。すると倉の戸が開いているので駆け寄るとお菊さんが腰を抜かして指を差していました。その正面に奥さんの首吊り姿が見えました。それで驚いてお菊さんを外にだすと主人を迎いに行きました」

「悲鳴を聞いたのはいつごろでした」

熊蔵が訊いた。熊蔵を真中に奥に兵助、手前に平左衛門が座っている。

平左衛門は、兵助の家の古くからの奉公人だった。商家でいえば番頭みたいな者だ。

「八つの鐘を聞いてしばらくしてからでした」

「それまで誰かに会いましたか」

「四つ過ぎに戻つて、九つの少し前に昼飯を食べました。そのときはお春さんに給仕をしてもらいました。その後も庭にいましたので

誰が見かけたとしても話はしませんでした。ただ、若が縁側に出てきたので挨拶をしました」

「その若様は何していたのかな」

「たぶん厠でしょう。すぐ戻ってきましたから」

「お志のは見かけなかったのだな」

兵助が言った。

急に兵助が口を開いたので、弥七は驚いたように兵助を見たが、
「気がつきませんでした」

と答えた。

倅は嘉介といつて二十一になる。最後には倅や下の娘、お仙にも話を聞かなければならないだろう。

ただ一人ずつ呼び出すというわけにはいかない。村役人の家族だし遺族だからだ。

「お菊を外に出してから中で何をしていたのですか」

と熊蔵が言った。

弥七は俯いて黙っていたが思い出そうとしているようにも見えた。
「死んでいるのを確認しました。それもぶら下がっている奥さんが苦しんだ顔をしていなかったからです。生きているように思えたのですが、でももう冷たくなって呼びかけても返事はありませんでした。そのとき裾の紐が解けたので結び直しました」

「奥さんはどんな人でした」

「それは優しくて私どもにも声を掛け親切にしてくれました。奥さんを悪く言う人はいません」

兵助は口述の筆記を読み上げ確認して爪印をもらった。

片右衛門はがっしりした体で髭の濃そうな四角い顔をした男だった。

「三十七歳、百姓です。名主さんの所の山林を管理しています。当日は朝、屋敷に出向き

ご挨拶をしてからすぐ作業場に行き人足の監督をしておりました。

以後屋敷に立ち寄ることもなく戻ったときに奥様の死亡を知りました。他には何も申しあげることはありません」

切り口上に言うと、黙って熊蔵と兵助を見た。

「知つての通りご地頭の依頼により本件の取調べをしている。知っていることがあつたら隠さずに述べてもらいたい。最後にお志の見たのはいつだったかな」

兵助が質問することにした。

ただ協力がなければ聞き出すことができない。

「五つには出向きましたので、そのときお会いしました」

「様子はどうだった」

「変わりなくしておられました」

「近ごろ様子が変だったという話があるがそれについてはどう思う」

「その噂は聞くことがあります」

と言つて片右衛門は息を詰めた。

「ただその詮議は私どもの任ではなく、与えられた仕事をするだけだと考えています」

当然の答えだとも思えた。ただそれでは内実が見えてこない。こちらの線からは無理だと思えた。ただ源之助も呼ばなくてはならない。そのことを告げて下がってもらつた。

弁当を取り出して三人で食べた。寺から茶をもらった。

「まったく嫌な野郎ですね。睨んでいましたよ。あの顔で人足を怒鳴り散らすと言いますよ」

熊蔵が息巻いていた。ただ兵助もその任ではなかった。

平左衛門が熊蔵を宥めていたが、

「ただ妙に奥さんは浮いていますね」

と言い出した。

「腫れ物に触るような扱いだし、本気に心配している人が見えてきませんね。見張りではないけれど誰か見てる人を付けませんか」

「言つことを聞かなくなるんじゃないですか。酒乱と同じですよ」

と熊蔵が答える。

「そうかなあ。近づかなくても遠くで見てる人ですよ」

「たとえば、前に自害を図ったとか、死にたいとか洩らしていて、周りもそれに同調していたとしたらどうかな。手伝わないまでも見逃していたとしたら」

兵助にはそんな気がしていた。裁かれる前に志の自分が自分を裁いていたのだろう。自分が元の自分でなくなるのに耐えられないし、周りにも迷惑をかけるとしたら。

「そうかもしれないね」と平左衛門は呟いた。

熊蔵は黙っていた。

「春、三十八、下女でございます。あの日最後に昼飯をとったのは弥七さんでした。その後、片付けやらしてずっと台所にいました。」

炊事、洗濯、掃除が仕事です。お仲が裏で物音がすると台所に来ましたので一緒に外へ出ました。倉の前でお菊さんが転んでいましたので駆けつけてそのことを知りました。奥様の姿は見ていません」

「そのことを聞いてまず何を思いました」

「驚いて何も考えられなかったのですが、ああ奥様が亡くなってしまった、と思っていました」

「もう少し詳しく言うとうのですか」

「奥様が時々おかしくなるのは皆知っています。普段はおとなしくて優しい奥様ですが、突然前触れもなく、叫んだり体を震わせたりします。そして男の低い声で何やら訳のわからないことを話し始めるのです。見えないものを見てそれに話し掛けているようにも見えます。しばらく続いてから叫び声をあげて倒れるのです。そのあと気が付くと、もうそのときは覚えていないのですが、人を傷つけたり物を壊すわけでもないのに、放っておくと旦那様が言われるのも尤もです。そんな奥様がとうとう自分の命を絶ってしまったと」

お春は目を伏せて袖を当てた。

「するとそんな徴しがあったのですか」

「そういうことではございませんで、気が付かないままになってしまった、ということでございます」

「お医者にはかかっていたのですか」

「それはもう最初のころは何人もお医者さんが来て診ましたが、匙を投げて、とうとうご祈祷までしましたが治ることはなくて最近余計ひどくなったように思えました」

「奥さんはそのことをどう考えていたのでしょうか」

「まったく覚えていらっしやらないのでしょうか。ただ周りの者が不審に思っているのは分かりますし、自分でもご注意しておられるのもこちらにわかります。だから今度のことも自分でお分かりにならないままなさったような気がします」

「なるほど」

と熊蔵は唸った。筋が通っているようにみえるが兵助はそうではないような気がした。しかし多くの者が納得するだろう。

「ちよつと尋ねたいのだが」と今度は驚かさないように兵助は言った。

「裏の倉に行くには台所の勝手口を使うか表に出て屋敷の脇を通るしか行き方はないのだろう。どちらにしても土間を通らなくてはならない。そうだな」

「はい。ただ庭からは外へでられます」

「裏の庭から外に出るのは木戸を通るのだな」

「はい。そこは生垣になっています」

「お志のは倉にどう行つたと思う」

「はい、台所にはずっと私がいましたから奥様は庭に出て木戸を通られたと思います」

嘉右衛門の屋敷は広くて、座敷の真中に廊下が通っていて左手裏側の奥に仏壇があった夫婦の部屋があつて、向かいの表側に奥から倅の嘉介、娘のお仙の部屋になっている。お春のいうように、部屋から裏庭に降りて生垣際の木戸を通れば裏に出れる。そこから道

ができていて倉や小屋がいくつか見え、坂のその向こうは林になっている

「話は違うが倉は何であんなにばらばらに建っている」

「それは、風水によったと聞いたことがございます」

「どちらにしても一番手前の倉になるな。錠はどこにあった」

「存じません。旦那様が持つておられたと思います。木の板に幾本か下がったものを見たことがございます」

「正気のないものが隠れて錠を持ち出し、腰紐を取り出しそのうえ人目を忍んで倉に行つて首を括るというようなことができると思えるのか。まあ、それはいいとして悲鳴は聞いたか」

「悲鳴と申しますと」

「弥助が聞いたというお菊の悲鳴だ」

「はい、それが私には聞こえませんでした」

「確かか」

「はい、間違えございません」

「弥七はそれを聞いて急いで倉に行ったというが、それには気付いたか」

「見ておりませんが、走っていくような物音は聞こえました。それで勝手口から覗こうとしたとき、お仲が急いでやってきたのです。それで二人で外に出ました」

「それではそれほど時間は経っていないということだな」

「はい」

「では、お菊のことを訊く。お菊はお志の探しに行くと言っていたのか」

「奥様が見当たらないというようなことを言っていましたけどどこへ行ったのかは知りませんでした。あの娘はよく気がついて働き者ですが一途で頑張りすぎるところがあります。それで奥様のことも心配していたのだと思います」

「どういふことかな」

「あの、その、先ほど仰った、徴のようなものを感じていたのでは

ないでしょうか。何も言いませんでしたが」

「お志のは度々外へ出歩くことがあったのか」

「はい、外ではないのですが裏の社にはお菊を連れしたり、お一人でも出かけていました」

「何を祈るのかな」

「うかがい知れませんが、跡取りのご病状かと存じます」

「そんなに悪いのか」

「胸の病だそうでお若い時からですので」

「奉公して何年になる」

「十二年でございます」

「それでは弥七の事を訊く。弥七は表にいたのか、それとも裏にいたのか、と思う」

「それは表です。昼の前も後も表の庭を手入れしていました」

「するとなぜ悲鳴を聞いて、勝手を通らないで裏へ行った。わざわざ遠まわりになるのに」

「そうですね」とお春は考え込んだ。

「私の気付かないうちに裏に回ったのですね。弥七さんなら廁の後ろを通れますね、普通は通りませんが」

「そういえば廁に行く嘉介に挨拶したと言っていたので、その近所で作業していたことにはなる。嘉介に会ったのはいつごろだったのだろう。」

「弥七も長く勤めているね」

「はい、私が来た時にもう長く勤めていると聞いたことがあります」
「わかった有難う」

「仲、十八、下女です。下働きのほかお嬢さんのお相手をします。あの日もお嬢さんと一緒に、ご本を見たりしてお話をしていました。お菊さんが奥様の事を聞かれて、しばらくしてから外が騒がしいよううで、お嬢さんが様子を見てくるように言われるので部屋を出ました。台所へ行ってお春さんと倉の方に行きました。奥様の姿は見て

いません」

「食事の後それまでお嬢さんとずっと一緒だったのですね」

「はい、間違いありません」

「お嬢さんはどんな人ですか」

「ご主人のお子様ですが親切で、着物などわけてくださります。お相手して楽しいです」

座敷に茶を出したお仲は明るい器量良しだが何も関与していない。お仙もそのような娘であるような気がした。

源之助は用で江戸へ出ていて事件に係われなかった。男の奉公人は朝出て夜帰るきりで当日屋敷に残っていたものはいなかった。

一日の仕事を終えて家に戻りたかったが、熊蔵と平左衛門を帰し兵助は一人で嘉右衛門の屋敷に向かった。門は閉ざされていたので脇から入った。

嘉介と話をするつもりだった。

嘉介は床を離れて机に向かっていた。嘉右衛門は兵助を紹介すると出て行った。嘉介は色の白い細い顔をしている。

「お加減はいかがですか」

「有難うございます。苦しむ程ではありませんがなかなか全快とはいかなくて」

「このたびは母上がご不幸でお悔やみ申しあげます。ついてはその件で皆さんにお話を伺っているのですが、よろしいでしょうか」

「はい、お聞きください」

「それではお亡くなる前の母上のご様子をお聞かせください」

「母は何か思い詰めていたと思います。今までの生活が失われるような、特に私の体のことを心配しすぎて、自分の方がおかしくなっていました。そのことが哀しくなりません。なぜ強く生きてくれなかったのか口惜しいです。母は優し過ぎました。弱くて生きているのに耐えられなかったのです。私も力になれませんでした。それが私の後悔です。母は不安で怯えていました。何か憑依してい

ると言うものがいますが、確かにそう見えるかもしれませんが、それは母が格闘している姿なのです。あの呪文めいた言葉を聞き取ることができたら母は救われたと思います。ただ私たちにはそれを聞く耳がなかった」

「どうすればよかったのです」

「分かりませんでした。慰めても頷くだけで母の心に届きません。それよりも周りの目を気にして段々閉じこもるようになりました。自分を閉ざしていった結果なのです。ただそれによってよく理解できることがあります。

苦しみや不安についてです。母は一人でない今は思います。いずれ母は寝込んで死んでいったでしょう。それが良くて自害が悪いなどとは到底思えません。母は死ぬ訳も考えてはいないでしょうし、迷いもなかったと思います。そのとき思い立ちすぐ実行したのです。その前に充分心の準備をしていたのでしょう」

「哀しいことですね。母上は一人だけで出来たのでしょうか」

「相談するということはありません。やはり一人だったのでしょう。それがかわいそうです」

「ところで当日、弥七を見かけていますか」

「庭で木を剪定しているのを見ました」

「いつごろでしょう」

「九つ半頃でしょうか」

「母上には」

「当日朝、挨拶をしましたでしたがそれが仕舞でした。変わった様子もありません。何かご不審がありますか」

「いや、確認です。母上が殺められたということはありませんし、見かけたものがないか尋ねているのですがそれも見つかりません。これで調べも終わりです」

「ご苦勞様です。よろしくお願いいたします」

「では失礼します」

兵助は屋敷を引き上げた。お仙の話を書く元気がなかった。日は

暮れかかっていた。

——下鶴間村宿の名主・嘉右衛門の妻、志のは某日午後、不意に思いつき家人に認められることなく裏の蔵に至り、そこで縊死いたしました。そのことで不審のすじはございません。以下医師の所見と発見者等の供述を添えます。以上ご報告申しあげました。

翌日、兵助と熊蔵の署名をつけ嘉右衛門の判をもらって地頭に送り届けた。

その後受け取りの書状が届いたきりで、他にはどこからも何も言っていない。

この編、完了。

深見藩六年

深見藩六年

坂本氏は代々甲斐武田氏の家臣だった。

貞吉は、武田勝頼に仕えていたが、天正十年（一五八二）織田信長によって武田氏が滅亡すると、父・貞次とともに徳川家康に召された。

家康は信長の残党狩りに与せず、武田武士を積極的に匿い採用していた。その後関東移封まで、武田氏の旧領甲斐は家康が所領、経営することになる。

信長は武田滅亡と同じ年、本能寺で明智光秀に討たれた。

そのあと、勢力を伸ばす秀吉と信長の子・信雄の争いに家康の絡んだ戦いが小牧・長久手の戦いになる。結局、決着はつかず、秀吉と、信雄が和議を結んだので家康も大義名分がなくなり、引かざるを得なかった。その戦いに、貞吉、貞次親子は参陣している。

小田原の北条を倒した秀吉に關八州をまかされることになり、天正十八年（一五九〇）八月一日、関東の領主として徳川家康が江戸に入城した。そのとき中原道を使い、側近の供と鷹を放ちながら道中の村々を見て行ったそうだ。その後も鷹狩や駿府城の往復にはこの道を通ったという。

そのあと村はすぐ徳川氏の直轄地になり、翌年五月、相模国東郡深見郷の内三百四十石は旗本坂本氏三代貞吉に宛行きされた、と聞いている。

小田原の後北条氏が秀吉に滅ぼされる前、村はその家臣の領地だった。書類が回っただけだ、と考えられるがあまりに年貢高が違うので検地が行なわれたのだろう。貞吉は周辺の代官だともいわれた。

文禄元年（一五九二）に貞次、慶長十一年（一六〇六）には貞吉が死亡するが、坂本家四代重安は秀忠に仕え大番となり大坂冬の陣、夏の陣では落城のとき手柄を立てたという。

村内に千二百坪の屋敷を構えていて、そこから出陣した。当時重安は年十六、屋敷には母と弟、それに何名かの侍と奉公人がいたはずだ。そのとき村民が従軍したらしい。

旗本の軍役からしても最低お供に侍一人、雑兵五人を引き連れ、馬一頭を引かせて馳せ参じなくてはならない。兵は甲冑持ち、槍持ち、馬の口取り、小荷駄、挟み箱持ち、足輕、草履取りなどの役をした。志願した者もいただろうが戦死者もいたらしい。

その後寛永二年（一六二五）幕命で江戸への屋敷割りが行われたのを契機に江戸に常住することになるが、弟君は病弱で村に残ったという。

村の寺（仏導寺）の本堂脇の墓地には板碑型の墓碑三基がある。貞吉のものに「心覚道春禅定門」の戒名が刻まれ、寛永十三年（一六三六）没の「花岳栄心大姉」と、承応二年（一六五三）没の「覚警道本禅定門」の墓碑がある。たぶん貞吉夫人と病気で閑居していた二男貞俊のものと思われる。

そのことが背景でもめごとが起こったことがある。何を血迷ったのか、自分はその末裔だというのがでてきた。隣村との境に山城の跡がある。あるといってもよく分からない。下の道はよく通るが上まで行く用がないし、不気味な感じがした。入り口だけあって、あとは道も覚束ない森になっている。

その近所にいる弥右衛門が、自分の畑はかつての殿様の敷地にあ

るから、自分は地頭の子孫だと言い始めた。

根拠は薄いし、誰も証明することはできない。百年以上も前のことを問題にすることがおかしいし、もしそうだったとしても何も変わるわけではない。当人がそれを信じているのは勝手だが、公言すればまずいだろう。

村人は変な奴だと思うただが、やはり地頭に注進する輩もいた。ばかげたことだが、捨てておくわけにもいかず一族、本所のお屋敷に呼び出され、用人からこつてり油を絞られた。

料料はなかったが、村役人連名で詫び状を提出する羽目になった。

村人が血族の由緒をなぜ求めるのだろう。それによって選民性を確認するのだろうか。先祖を誇ることはよいことだろう。尊敬し感謝することは必要なことだ。しかしその理由を血脈だけに求めるのは悲しい気さえする。先祖がいなければ自分の存在さえもないとすれば、理由自体もいらなくはない。ただ初期の開拓者が零落したり、後からきたものが裕福になるとか、村内の格差が微妙な陰影を血筋につけることになる。それは武士における家格、たとえば官位とか家柄、身分といったようなもので複雑な格式待遇があることの反映でもあった。

百姓は侍を手本にしていることは間違いなかった。同根という意識もあつたろう。その倫理意識も作法も習俗まで身分の枠を越えない限り模倣され続けたといえる。反対に武士にとっても百姓は教育される対象ではあつたが、深く係わることはなかった。岡惚れの男のようだ。

徳川幕府も三代になって権威が確立した。権威には儀礼が要求される。儀礼には行儀作法が必要になった。伝統を模範にするしかなかった。儀式は伝えられたものではあるが、どこか伝わったものでもある。最初の意味は忘れられて形だけが残っている場合もある。はつきり言えば兵助は儀式めいたものが好きではなかった。特に

権威めかした大仰さが嫌いだった。中身のない空疎さを感じるだけだった。

寛永十年（一六三三）重安は常陸国信太郡内に二百石の加増を受ける。たぶん大番組頭になったはずだ。そのあと五代目が養子に入り跡を相続した。もともとそれが条件だったのか、弟（百助貞政）に分与することとし、深見村は本家と分家の二給支配となった。

村は領主を中心にした体制ではあるが、ここは地頭が二人いるので、分割されている。それも任意の耕地の合算になっていて、単に名請け人を二つに分けているだけだ。それぞれに村役がいる。統一体としての村は地頭の共同支配になる。血族、地縁をばらばらにして納税体制を作り上げたようにみえる。

この本所の殿様、坂本五代目小左衛門重治が出世して大名になった。村は坂本氏の本貫だから一時的にでも深見藩というのが存在したことになる。

一万石の旗本は大名である、といってもいいし大名でなければ神社奉行になれないといってもいい。

大目付から寺社奉行になるのにあたって七千八百石を加封され晴れて一万石の大名であった。元は五百七十石の旗本坂本四代目重安の養子に入って、弟に二百七十石分けたあとの出世であるとすれば、たいした者だと誰しも思うものだ。願わくばお役を勤め上げそのまま子孫に残してくれれば万歳であったのだろうがそうはいかなかった。陣屋を立てる暇もなく、出世をした同じ理由で禄を取り上げられてしまったのだろう。

殿様は正保三年（一六四六）家督を相続して十七歳でお目見え、大番勤めになる。

当時、武官は五番方に分かれ、旗本のおよそ七割がその役で出仕していた。番方とは平時の軍であるから、事務的な用はなく城中に詰めて警護守衛を担当している。多くの旗本は初任としてこの武官

になる。

知行高によって凡そその配属が決まっていて二百石以下は小十人、二百石は大番、二百五十石新番。三百石以上が書院番、小姓組といった具合だ。

殿様が勤めた大番は老中支配で十二組あり、各組は番頭一人、組頭四人、番士五十人で構成されている。

江戸城西丸・二丸の守衛とともに大坂城と京都二条城に一年交替で二組ずつ在番するのを任務とした。

のちに分家の殿様が大阪城警護を仰せつかり旅費がないというのが、村に御用金を申し付けたことがあった。

武官の勤務は三交替である。朝番は五つ（だいたい八時）、夕番は四つ（十時）、寝番は七つ（午後四時）までに登城する。熨斗目、肩衣に半袴、腰に大小の出で立ちだ。寝番は交代で不寝番をするが、あとの者は仮眠するので番袋に弁当と寝道具を入れて持参した。

もちろん登城には身分によって供を連れる。旗本の象徴は馬と槍だ。そのため馬の口取りと槍持ちはかせない。火事羽織や提灯、雨具など細々とした物を入れる挟み箱持ちに草履取りもいる。あとは侍か中間が護衛もしなくてはならない。実際は駕籠で中間も雇いだったりした。

兵助も後年奉公のときお供をしたことがある。なにか気恥ずかしいものだが、脇に退く町人を見れば侍の面目も立つのかもしれない。ただ、お供は殿様が下城するまで待っていないなくてはならない。冬の寒い日や雨、雪のときは大変だった。

勤務は三日に一日だったが、明けの時でも供番があるので頭からの下知があるまで待機していなくてはならなかった。もちろん無断の他出もできない。原則的に旗本は大事の時に駆けつけなくてはならないから、泊まりの外出はできなかった。

寛文元年（一六六一）、三十二歳で新番に移り、翌年小納戸役。二百俵の加増を受け布衣を許される。

六年後、更に二百俵を加増される。

新番は若年寄支配の六組で各組に頭、組頭、番士二十人がいて日常は本丸表の一番奥、土圭の間に詰め將軍の出行、特に社参・靈屋への出行に前駆けし、武器・馬の見分にあたった。

もともと出世は自分の力というより上司に認めてもらい、推薦されることによるのだろう。

——いよいよ公儀を重んじ、御為第一に承知申しあげ、後ろ暗いことなく万般精入れてご奉公いたします、とその職を拝するにあたって誓うことになる。

四代將軍家綱が亡くなるとき、殿様は五十一歳、小納戸であり、病床に詰めていた。

紛らわしいが納戸は將軍の衣服・調度を管掌し、物品購入、支払いを扱い、儀式用の金銀衣服の下賜も担当した。一方小納戸は小姓に繋がる役目で將軍の食膳から髪結いまで日常の細務に従事し、半数交代で宿直した。

徳川五代將軍綱吉が宣下したのは延宝八年（一六八〇）だった。

五月六日、家綱の病状が激変する。七日、館林宰相二の丸に移り、本丸にて將軍に謁し、伝家の宝刀を賜う。

八日、薨ずる、年四十歳。

すんなり將軍の移譲が決まったわけではなかった。

幕府の政務は將軍が主裁し、人事の任命権をもっているのであるから誰もそのことに文句は言えないし、独裁者は家族に弱いものだ。まして孝行息子ときている。

桂昌院の意を汲んで前代に召し仕えの御側衆、御小姓、小納戸役

人は解任された。

そのときまで殿様、坂本重治は普通のお勤めをしていた。小納戸役は十八名、他の者が御役御免になるなか功ありとして、殿様は五百石を増加され霊屋造営の奉行を勤めることになる。

翌天和元年（一六八一）、従五位下右衛門佐に叙任され、大目付となる。同十月十九日、切支丹改奉行を兼ねる。

翌年四月三日、役料千石を増加され都合二千二百石となった。この間何があつたかはわからない。しかしなんらかの引きがなければ小納戸役を最後に七百石持ちで隠居してもよかったはずだ。

坂本の殿様は実直な人のような気がする。特段、策略を用いることもなかった。お役目に少し色をつけたかもしれないが、賄賂を特にもらったり、悪事を働いたわけではない。

ただ、はつきりしているのは將軍の代替わりにおいて綱吉側に付いたことだ。前將軍の一番そばについていたわけであるからそれなりの見聞があつたはずだ。それを認めてくれる人がいた。

模様替えが終わって、御台所以下館林家の奥向きのものはそっくり本丸に入った。

綱吉の子徳丸も若君となり、生母のお伝の方の実父小屋権兵衛は、堀田正俊の弟分にして名前も堀田将監と改め三千石寄合衆、無役の旗本になった。この男は館林では城内の掃除方を勤めて、俗に黒鍬の者といわれる下級御家人だった。もともと道楽者のところへ、世子の祖父ということから、出世したので手がつけられなくなった。倅の権九郎は輪をかけた乱暴者だった。父子揃って大酒を飲み、博打を打ち、無頼漢と付き合いがあつた。そんなわけで家計は苦しかった。

坂本の殿様はこの二人をかばった。そればかりか援助をし世話をした。そうすれば余慶があると、抜け目なく思っていたのではあるまい。世間に父子の困窮を隠したかったのだ。

天和二年（一六八二）十月十六日、

——常々諸事に念を入れて申しつけている段奇特である。

という理由で寺社奉行に拔擢された。十月加増され一万石の大名になった。

これを横目で見て、出世の糸口にした男がいた。お小姓で喜多見若狭守重政というなかなかの才子で綱吉の覚えもよかったが、その弟に茂兵衛重直という三百俵取りの無頼漢がいて、当初その行状を訓戒していたが、これが将監父子と懇意になり屋敷に始終出入りしていた。その遊び仲間の不始末を何度か助けているうちに重宝されるようになった。

それで弟を通じて父子の世話を大いに仕出すと、半年後の正月殿様と同じ上意によって、六千八百石加増の一万石となり御側衆上座を仰せつかった。このことは大老でさえも発表があるまで知らなかったというから、この二件には、お伝の方のとりなしが与っているように思われる。

ただこの父子は、博打のもつれからあっけなく兇刃に倒れた。異例の搜索が行なわれ下手人は捕われて磔刑に処されたが一家には後継ぎがなかったので家はそれっきり断絶した。悪人らしい最期であり処遇だが、お伝の方の執念による探索の結果でもあった。

殿様のほうは、そのあと領地において検地をし、地頭法として三十六力条の定書を所領の村々に布告した。

しかし五年後の貞享四年五月、生類憐みの令がでた年だが、——つとめよろしからず。

との理由で本多忠周とともに職を罷免されたうえ逼塞を命じられた。

元禄二年（一六八九）六月には先に加増された所領を没収される。七千八百石は役料と考えれば当然であるともいえる。

坂本の殿様は不満に思っではいなかっただろう。元禄六年（一六九三）七月二十七日死亡、墓所は江戸青山持法寺にある。

次男の治之は常陸国鹿島郡、下野国那須郡内に五百石で分家している。

長男の相続した知行地は本村ほか、上野国山田郡東金井村、境野村、同勢多郡田沢村。常陸国信太郡本橋村、同鹿島郡幡木村で千七百石になった。

熊蔵 冬の恋

熊蔵 冬の恋

ちよのことを、だれかに相談しなくてはと、ずうつと思っていた。自分の中では、決めたことで迷いはないが、一種の形を作らなくてはいけない。

どんなふうに見られるのだろうと、そのとき初めて考えて、踏ん切りがつかなかった。でもずるずるして、ちよに迷惑を掛けるわけにはいかない。

平左衛門に声をかけて見ることにした。

兵助のところの長くいる奉公人だった。商家でいえば、番頭にあたるだろう。もう四十近くになるが、独身で温厚な人柄だった。ただズバッと厳しいことを言ったりする。噂では、先々代の隠し子ではないかと言われていた。

兵助はそんなことを気にもしていないだろう。気付かないかもしれない。意外と当事者には噂が届かないことがある。反対に言えば、自分も噂の対象になっている可能性もあるということだった。自分はいいが、ちよを傷つけてはいけない。

日が暮れるころ出かけて行って、

「相談があるのですが」

と、切り出してみた。

ちよと付き合って、子も身ごもったと話をした。

「熊さんもなかなかやるな」

と、からかい気味だったが、さてこの後どうするか、と思案顔になった。

「熊さんが考えているように簡単には済まないな。おちよに恥をかせるわけにはいかないからな」

平さんはそう宣告した。

「オヤジには俺から話すとして、善は急げか、ちよっと待っててくれ」

と言つて、母屋の中に入つて行つた。

しばらくして、平さんが戻つてきて、

「オヤジは、おちよさんを連れて一緒に来るようにと言っているよ」
兵助はどうしようとするのだろうか。

もたもたしてもいられないので、

「へい」

と返事をして、そのまま勘助の家に急いだ。

話を伝えると、ちよは、顔つきが引き締まったが、出かける支度を始めた。

冬の日は短く、もうとつぷりと夜の陰が広がっている。

「母さん、ちよつと出てくるから」

と断つて、ちよは提灯に火を入れた。

ちよは何か覚悟をしているのか、堅い表情のまま黙っていた。

兵助の家に着くと、手前の座敷に通された。

「話は平左衛門から聞いたが、所帯を持つということでは間違いないな」

勝手の方から出てきて座ると、そう兵助は訊いて、二人を見つめた。
熊蔵はうなづき、ちよは小さな声で、

「はい」と答えた。

二人でどうしようかという話は何度かしていた。ただ、踏ん切りがつかなくて、現状を大きく変える案は出てこなかった。ちよは、

勘助を迎えるときはまだ小さくて、具体的な手続きはわからなかった。それに、もよがでて行ってしまうて、近所付き合いも少し、遠慮がちではあった。

世間体を気にするというか、気が引けるような、おっかなびつくりな態度に家族がなってしまうていた。

「まず」

と一呼吸、兵助は入れた。

「結婚は二人だけで決まるものではない。それに子は村の財産だ。熊蔵は父親が亡くなってから天涯孤独で、家の体をなしていない。

が、だ。熊蔵は養子にいくわけではない。勘助は養子だが、立派な一家の主だ。わかるな」

兵助は、二人を代り番に眺め、諭すように話した。

「私が熊蔵の親代わりになろう。まあ、仲人親ということだが。勘助に縁組の了承を得て、結納、式と。当然華美にはならない、形だけといってもいいかもしれないが、しっかりとやっていこう」

「お願いします」

「ありがとうございます」

熊蔵とちよは同時に答えてしまい、顔を見合わせた。

ちよは緊張が解けたようだ。いつもの笑顔になっている。二人で悩んでいた問題も解決してしまった。

ちよが熊蔵のあばら家へやって来るのだ。二人で暮らせるように家の手入れも始めなくてはいけない。やらなくてはいけないことが一杯で、熊蔵は興奮した。

外へ出ると、熊蔵が提灯を下げ、ちよは癖になっていたように、熊蔵の袖をつかんだ。雪がちらちら、と落ちてきた。風がないので、ゆっくりと舞っている。

「幸せになろうな」

熊蔵は前に向かって言った。

ちよは袖を何度か引いた。それが返事の合図なのだろう。そして顔が袖に近づいた。

道は少し下っていてちよの家の手前で上りにかかる。そのまま左に折れて階段を上がれば、山王さんになる。その際にちよの家はある。通りの両側には家が並んでいて、灯も洩れるから真つ暗というほどでもないが、歩くのには用心しなくてはならなかった。

そのころには、うつすらと雪が積もり階段を白くしていた。静かで、すっかり闇の中に入ったように感じた。

入口まで送り届け、戻るつもりで振り向くとちよが胸に飛び込んできた。

慌てて、提灯を落として抱きとめた。

火が消えて、しばらく抱き合っていた。目をつぶると、ちよの温もりが余計感じられた。気が遠くなるようで、もたれ合っていたが、そのままと倒れそうになって、腕を緩めた。

接吻をして、別れた。

ちよは何も言わなかった。

確かにちよは変化していた。明るさは変わらないが、少し控えめで、しとやかになった。

少女から若い女に。そのちよに子ができる。改めて熊蔵は、責任を自覚せざるを得なかった。

正月まであともう幾晩かで、寒さも厳しくなっていた。

戻ると、囲炉裏いろりの火をおこし湯を沸かした。

先立つものは確かにないが、これから精一杯頑張ってみよう。なんとかやってみせるよ、おやじ。

ありがとうよ、おやじ。兵助さんも手助けをしてくれるのだから、おやじがいたからなんだよな。みんなのおかげだ。大切に、感謝しなくちゃいけないな、おやじ。

白湯を飲んで、煎餅布団にもぐりこんだ。隙間風は入ってくるが、

幸い雨漏りはしていなかった。明日から掃除方々修理も始めよう。
あれこれ考えているうち眠り込んだようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3346j/>

村役人と小歩き

2011年10月6日11時30分発行